

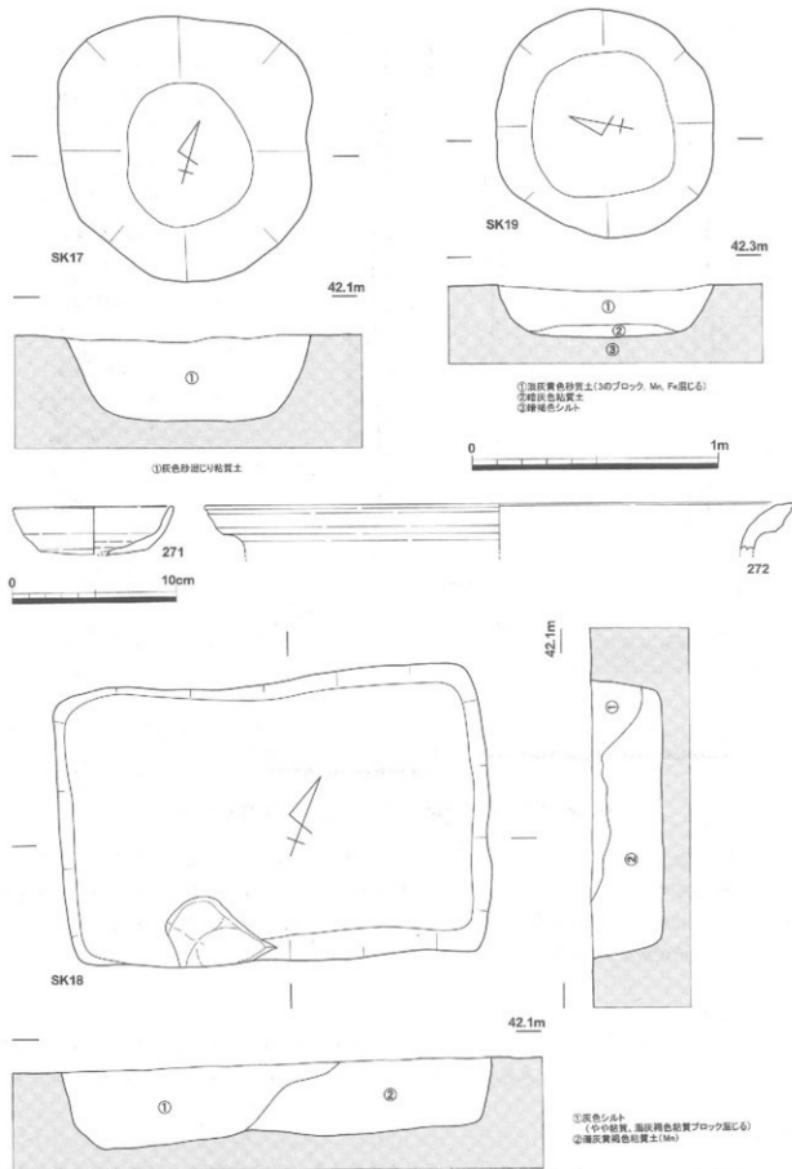
第73図 SK13~16平・断面図 (1/20)

SK16 (第73図)

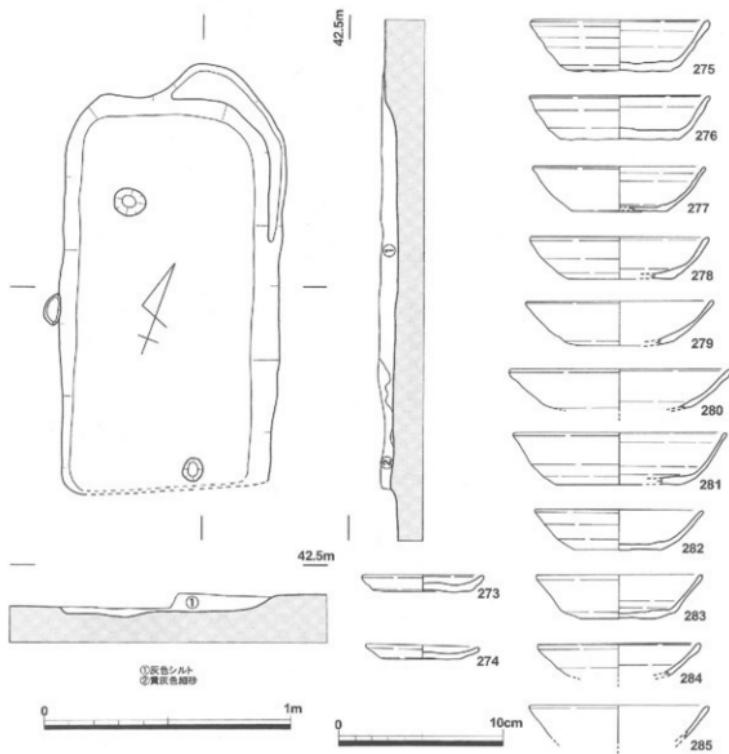
B 3 調査区で確認した不整形な土坑で、断面は皿状を呈する。埋土は3層で、内2層はブロック状の埋土である。層1がほぼ全体を占めるため、短時間に埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK17 (第74図)

B 3 調査区で確認した円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高



第74図 SK17~19平・断面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)



第75図 SK20平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/3)

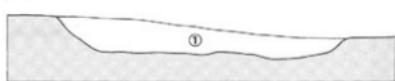
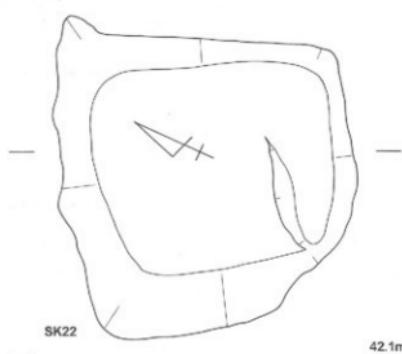
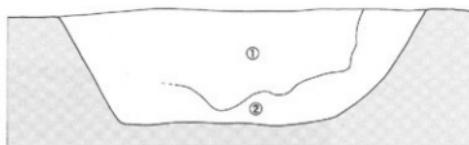
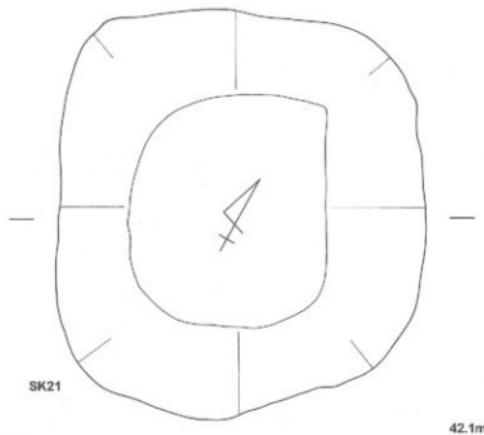
い。出土遺物は、271・272が出土している。271は、土師器杯で底面は糸切りが見られる。272は瓦質土鍋で、口縁部が外反し、外面に肥厚している。271の形態のみでの位置づけは難しいが、本遺跡出土遺物が大きくは13世紀代と14世紀代に分かれることから13世紀後半代の所産と考えておく。ただし、272がこの時期の所産かどうかは不明である。

SK18（第74図）

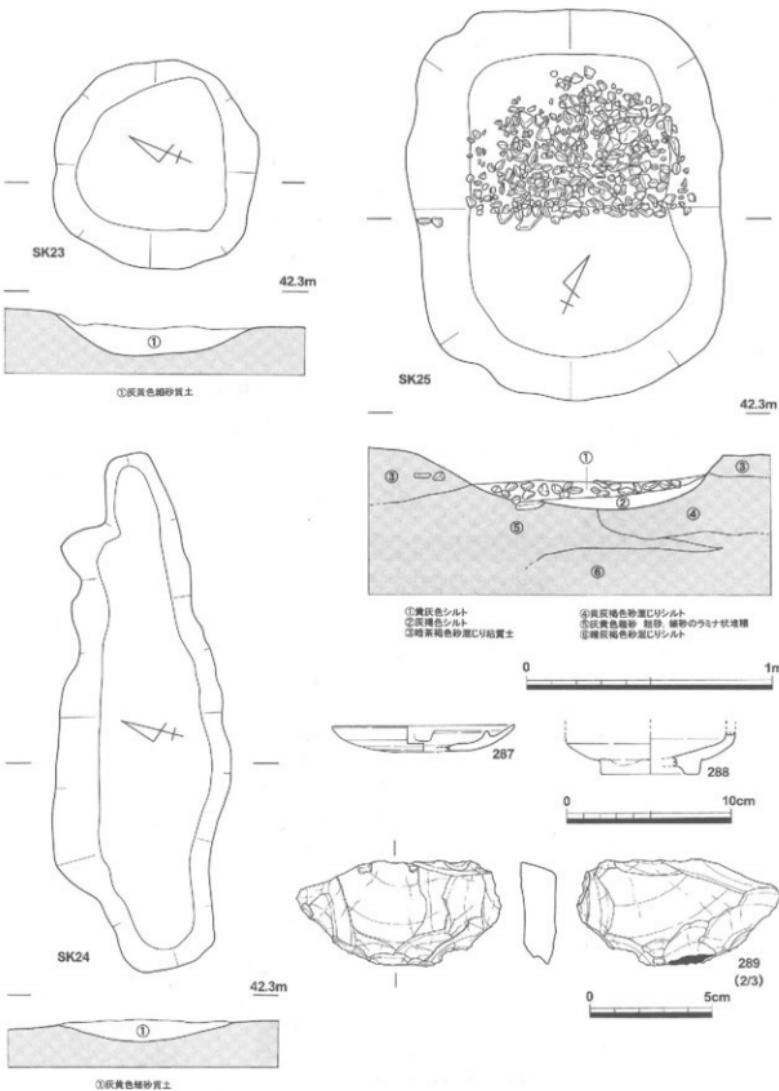
A 2・B 3 調査区で確認した四角形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、東西で大きく分かれる。層2でいったん埋められた土坑を再度掘削しなおした状況を呈する。出土遺物はない。

SK19（第74図）

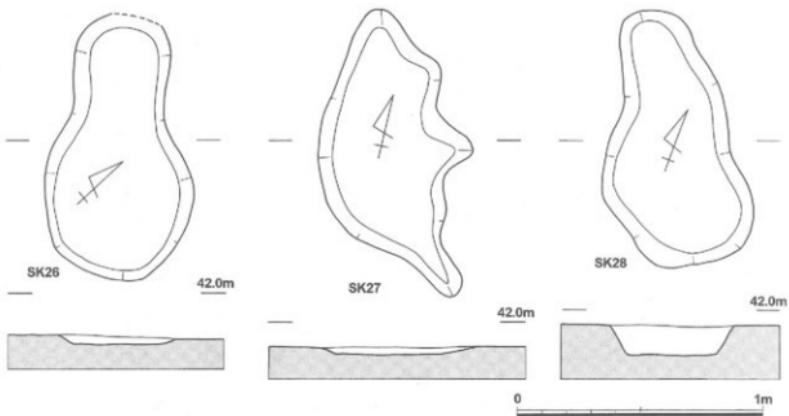
A 3 調査区で確認した円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、土坑底に薄く層2が確認されるが、大半は層1で埋没しており、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



第76図 SK21・22平・断面図 (1/20)、SK22出土遺物実測図 (1/3)



第77図 SK23～25平・断面図 (1/20)、SK25出土遺物実測図 (1/3)



第78図 SK26~28平・断面図 (1/20)

SK20（第75図）

C 5調査区で確認した長方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は2層で、大半が1層で構成されている。土坑内に柱穴が2穴確認されるが、土坑に伴うものかどうかは不明である。土坑内からは273~285が出土している。273・274は土師器小皿である。両者ともヘラ切り底である。275~285は土師器杯で、確認できるもの全てがヘラ切りの底部を持つ。形態全体からはⅢ-①~③期、14世紀前半代に位置づけて問題ない。

土坑の形態から、この時期の土坑墓の可能性もある。

SK21（第76図）

C 5調査区で確認した方形の土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、部分的に境目が不明瞭になる。短時間に埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK22（第76図）

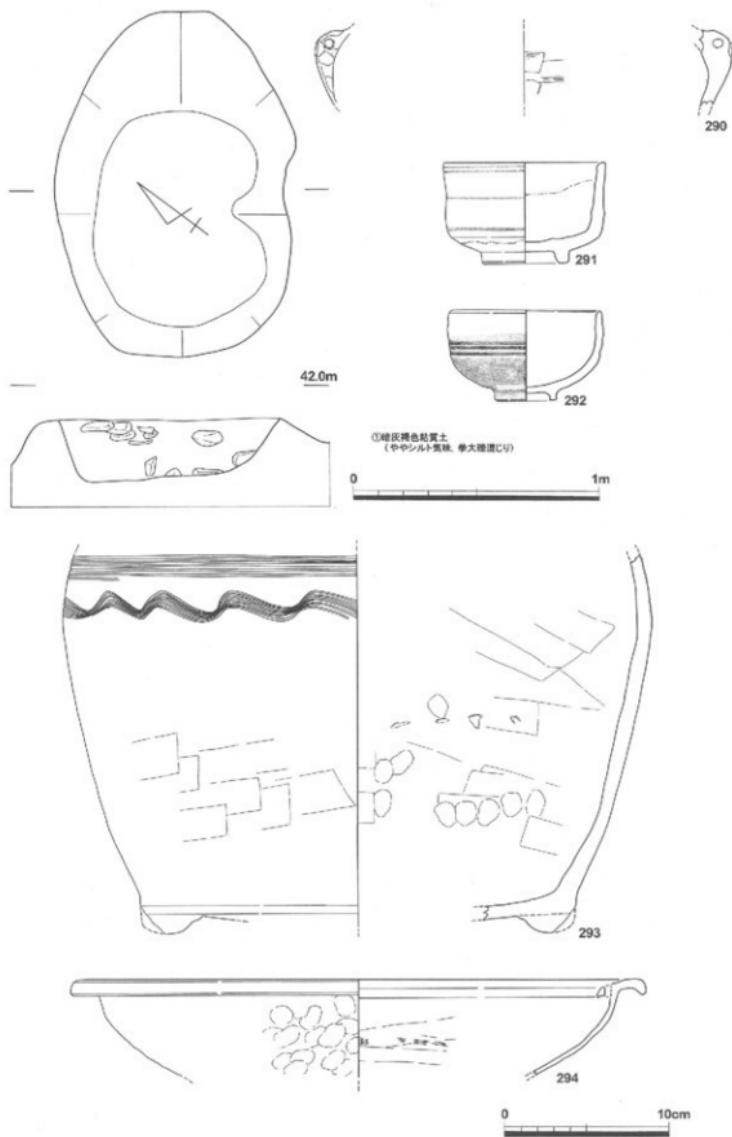
C 5調査区で確認した方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物は286、土師質土釜の脚部先端が出土している。中世の範疇で考えられる。

SK23（第77図）

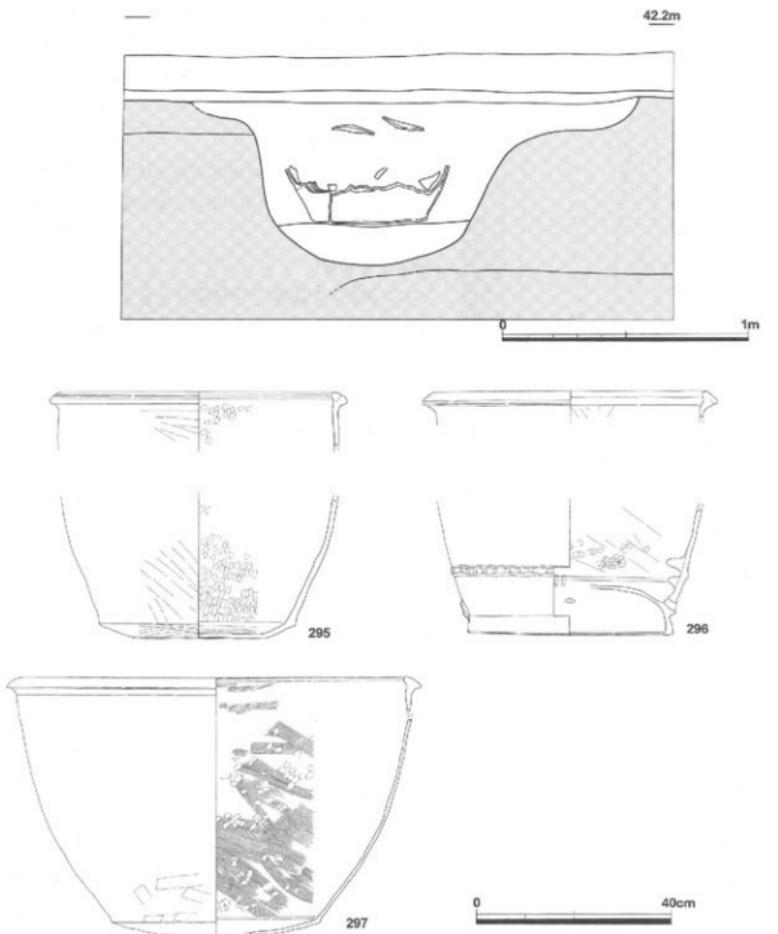
B 5調査区で確認した円形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。

SK24（第77図）

B 5調査区で確認した不整形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層で、埋められた可能性が高い。出土遺物はない。



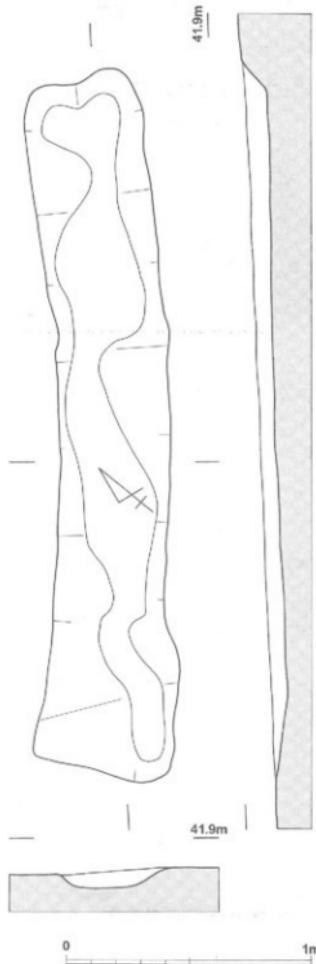
第79図 SK29平・断面図(1/20)、出土遺物実測図(1/3)



第80図 SK30断面図（1/20）、出土遺物実測図（1/10）

SK25（第77図）

C 5 調査区で確認した方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は2層で、層1には円窓が多数含まれている。性格は不明で、287～289が出土している。287は、備前系陶器の灯明皿である。内面に仕切りがあり、18世紀前半～第3四半期頃と考えられる。288は肥前系陶胎染付で、外面は灰釉が見られる。18世紀代と考えられる。289はサヌカイト製スクレイパーである。287・288から18世紀代に位置づけられる。



第81図 SK31平・断面図 (1/20)

SK26 (第78図)

C 5・D 5調査区で確認した不整形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層である。出土遺物はない。

SK27 (第78図)

C 5調査区で確認した不整形な土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層である。出土遺物はない。

SK28 (第78図)

D 5調査区で確認した不整形な土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層である。出土遺物はない。

SK29 (第79図)

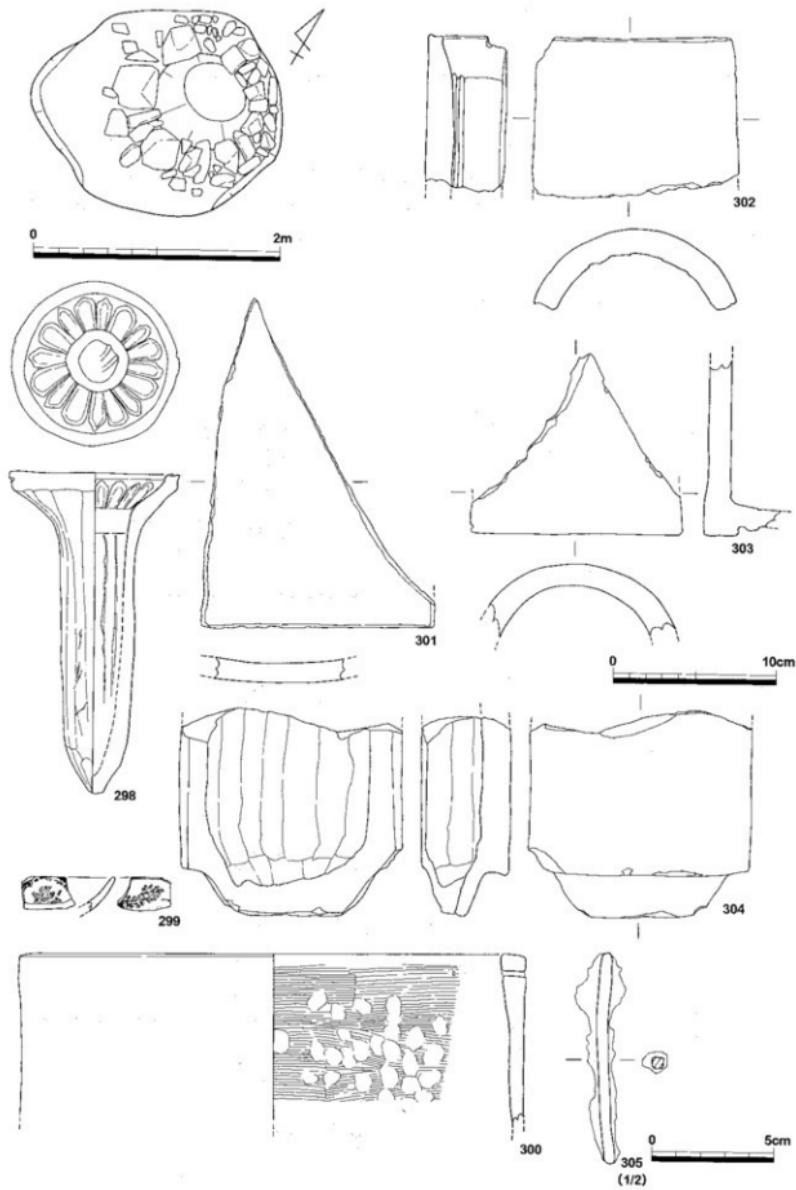
D 5調査区で確認した不整形な土坑で、断面は逆台形を呈する。埋土は1層である。土坑斜面に人頭大の石が見られる。土坑の性格は不明である。出土遺物は、290～294である。290は、羽釜の耳部で体部は確認できていない。291は肥前系陶胎染付で、口縁部に敲打痕が見られる。18世紀代に位置づけられる。292は瀬戸・美濃系の腰錆碗で、内面及び口縁部外面には灰釉、その他の外面上には鉄釉が見られる。外面には櫛描状沈線が施され、18世紀後半に位置づけられる。293は土師質壺の底部で、円球状の足が付いている。294は培塿である。土坑の埋没年代は、18世紀末～19世紀初頭頃と考えられる。

SK30 (第80図)

F 5調査区の断面で確認され、平面形態は不明である。断面は上部の広がるU字形を呈し、295～297が出土している。この土坑は、297等を設置するための土坑で、安定性を得るために土坑掘削後、土を平らに引いている。295・296は廃棄段階での投入と考えられる。295・297は土師質壺で、296は土師質風呂である。幕末以降と考えられる。

SK31 (第81図)

C 5調査区で確認した長方形の土坑で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は1層である。出土遺物はない。



第82図 SE01平面図 (1/20)、出土遺物実測図 (1/3)

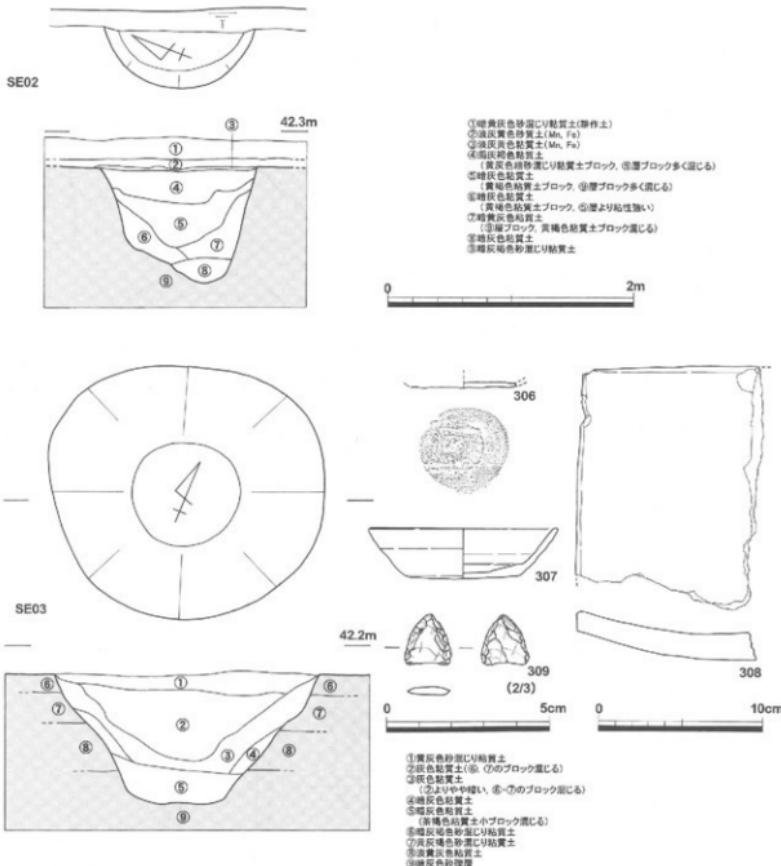
6 井戸

調査区内で検出された井戸は、石組井戸1基、素掘井戸3基の計4基である。

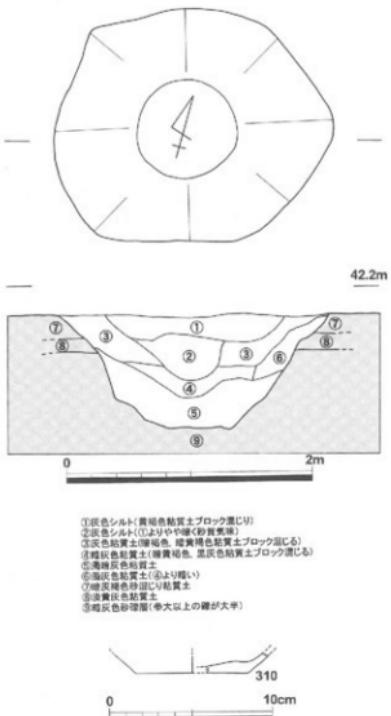
SE01 (第82図)

B1・2調査区で確認した。この井戸は、調査直前まで利用されていた石組井戸で、出土遺物は298～305で、花立て・染付け・土師質大甕・瓦・不明鉄製品が出土している。299は肥前系磁器皿で、コバルト呉須が用いられ、文様は型紙摺りである。明治・大正時代に位置づけられる。出土遺物からも近代以降と考えている。

SE02 (第83図)



第83図 SE02・03平・断面図 (1/40) SE03出土遺物実測図 (1/3)



第84図 SE04平・断面図（1/40）、
出土遺物実測図（1/3）

B 3 調査区で確認し、半分が調査区外である。検出部分からは、円形でやや不整形な断面形態である。埋土は5層に分かれ、徐々に埋没したことが伺われる。埋土は粘質土で構成されており、湧水が顕著であった可能性は低い。なお、出土遺物はない。

SE03（第83図）

B 3 調査区で確認され、円形で逆台形の断面を呈する。埋土は5層に分かれ、徐々に埋没したことが伺われる。層9が砂疊層で、この層からの湧水を利用したものと考えられる。埋土は粘質土で構成されており、湧水が顕著であった可能性は低い。出土遺物は306~309である。306は土師器杯の底部で、ヘラ切りが見られる。307も土師器杯で、底面は糸切り、口縁部が外上方に直線的に延び、小型化すること、深さはまだ浅くなっていないことなどからII-⑧期以降、13世紀代以降と考えられるが、他の資料との関係から13世紀後半代にとどまると考えられる。308は平瓦で、近世以降と考えられる。309はやや膨らみを持つが平基式の石罐である。いずれの資料も遺構上面で検出されており、SE03の年代決定の資料とはならない。

SE04（第84図）

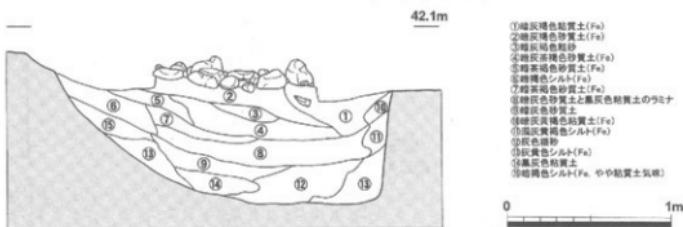
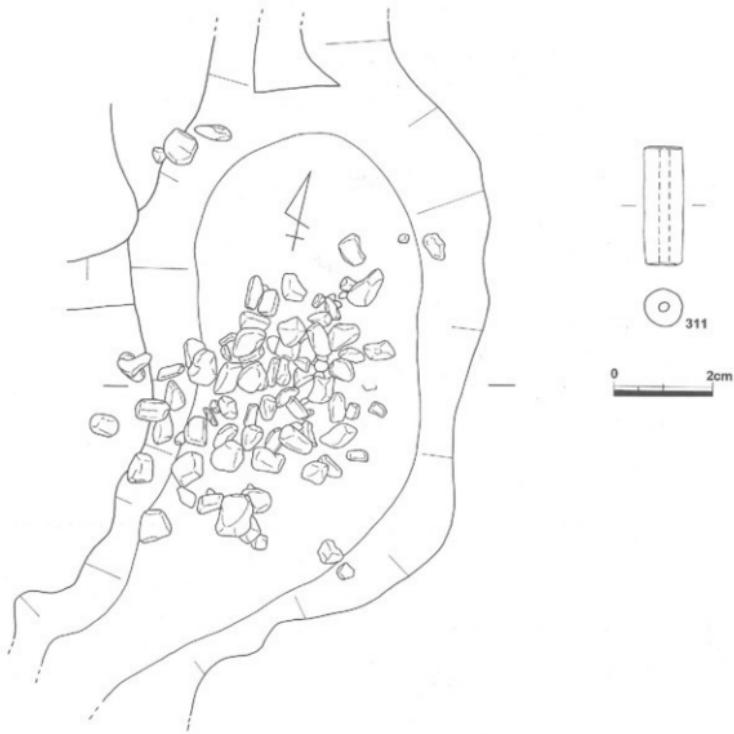
A 3・B 3 調査区で確認され、SE03同様、円形で逆台形の断面を呈する。埋土は6層に分かれ、徐々に埋没したことが伺われる。層9が砂疊層で、この層からの湧水を利用したものと考えられる。埋土は粘質土で構成されており、湧水が顕著であった可能性は低い。出土遺物は310である。310は土師器杯の底部で、ヘラ切りが見られる。年代は不詳である。

7 不明遺構

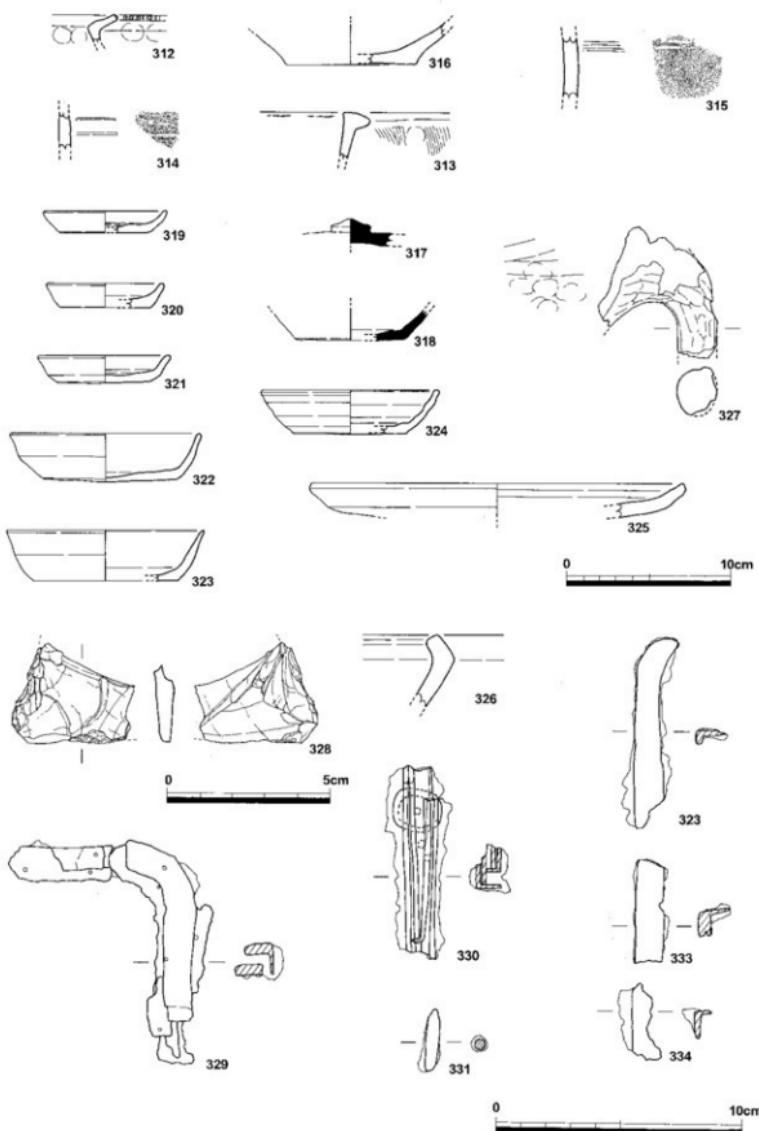
概報作成段階では、不明遺構として列記したものも多いが、その多くは遺構面に溜まった包含層であり、ここでは、遺構として位置づけられるもののみを取り上げ、前者は包含層出土遺物として次項で取り上げた。

SX01（第85図）

C 5 調査区で確認したSD48上層の楕円形の落ち込みで、人頭大の礫が多数出土している。この礫中からは、311の管玉が出土した。礫は、断面でも確認できるようにSD48埋没後に礫を敷いている。管玉のみの出土であり、年代は不明であるが、古墳時代の祭祀にかかる遺構の可能性もある。



第85図 SX01平・断面図(1/30)、出土遺物実測図(1/1)



第86図 包含層出土遺物実測図① (1/3)

8 包含層（第86～93図）

312～417は、包含層出土の遺物である。中には遺構が検出されていない時期の資料もあり、この遺跡の成り立ちや周辺への広がりを考える上で重要である。

概報段階で上記SX01以外の不明遺構として取り扱ったものもこの中に含まれる。これは、その多くが溝状遺構の周辺で確認され、明確な掘りこみなどが確認できていないと判断した結果である。また、単独の溝に関係するとは断定できないため、包含層資料同様の位置づけにしている。

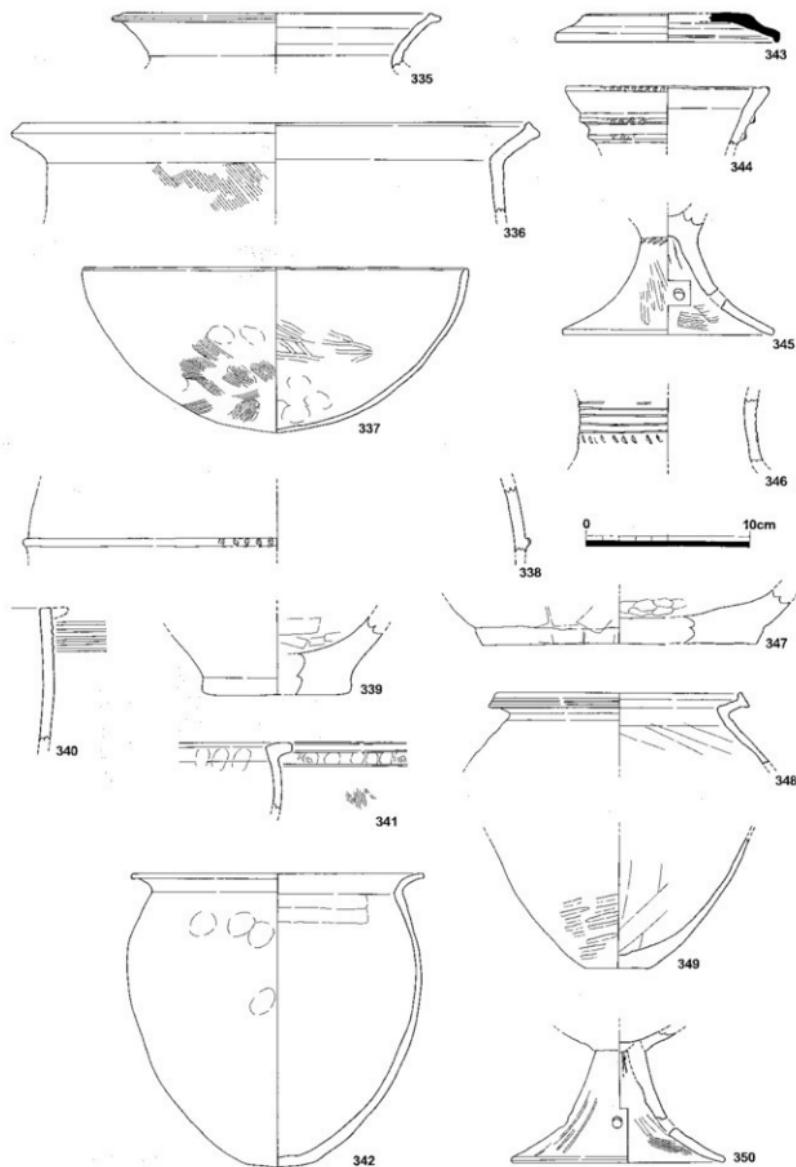
312は、弥生時代前期の壺で、口唇部に刻目が見られる。313も同時期の壺で、外面はハケ目調整である。314・315は同時期の壺体部片で、2条の沈線が見られる。316は同時期の壺底部である。317は須恵器杯蓋片で、宝珠つまみの先端が扁平になっていないことから飛鳥I～Vの範疇と考えられ、ほぼ7世紀代に位置づけられる。318は須恵器杯底部片で、時期は不詳である。319～321は土師器小皿で、319・320は底面ヘラ切りである。322～324は土師器杯で、323の底面は糸切りである。319～324は他の遺構群と同じく13世紀代に位置づけても問題ない。325は土師器皿の形態を持つが、器壁が厚く古くさかのほるものではない。焙烙の可能性もある。時期は不明である。326には条痕は認められないが、土師質すり鉢の破片と考えられ、Ⅲ-⑦～⑨期、16世紀代の資料と考えられる327は土師質土釜の脚で年代は不詳である。328はサヌカイト製の石器片であるが、製品名は不明である。329～334は不明鉄製品で、形状からは金具と考えられるが定かではない。また年代も不詳である。335は須恵器壺の口縁部で、外反して端部に平坦面を持つものである。336は土師質土鍋の口縁部である。337～342、344～350は弥生土器である。337は鉢で、丸底を呈し、外面はハケ調整、内面にはヘラ磨きが部分的に見られる。VI様式の範疇で考えたい。338は前期の壺体部片で、1条の貼付突帯条に刻目が見られる。I-④～⑤様式に位置づけられる。339も前期壺底部と考えられる。340・341は前期壺口縁部片である。340は5条のヘラ描き沈線を持ち、341は1条の沈線を持つ。342は後期の壺で、短く外反する口縁部を持ち、底部は限りなく丸底に近い平底である。VI-1様式頃と考えられる。343は須恵器杯蓋で、宝珠つまみ部分が欠損している。单品での評価は難しいが、天井部が平坦ではあるが、天井高が比較的高いことから平城宮土器Ⅲ頃、8世紀中葉と考えておく。344は壺口縁部で、直線的に開き、2条の貼付突帯及び口唇部に刻目が認められることから、Ⅲ-1様式に比定される。345は高杯の脚部である。「ハ」の字形に広がり円孔を持つ。V-⑧様式頃。346は壺頭部で、5条の沈線と列点文が見られる。全体形状が不明であり年代は不詳である。347は壺底部で、胎土から前期と考えられる。348は壺口縁部で、口縁端部を上下に拡張し、退化した凹線文が見られる。IV～Vの過渡期頃に位置づけられる。346の壺頭部も同様の時代か。349は壺底部で、平底で外面にタキ目が見られる。350は高杯脚部で、345とほぼ同時期の所産と考えられる。351は須恵器杯蓋片で、宝珠つまみ部分が欠損している。343と同時期と考えられる。352は須恵器杯底部である。353も須恵器杯で、直線的に外上方に広がる口縁部を有する点から9世紀の所産と考えている。354も須恵器杯で、353同様の形態と考えられる。355は須恵器皿で、高台部分から屈曲せずに水平方向にのびることから353同様の時期と考えられる。356は土師器杯で、底面には板目压痕が見られる。357は焼締陶器で、産地は不明である。近代に位置づけられるものかもしれない。358は土師器小皿で、ヘラ切りの底面を持つ。359は肥前系陶器皿で、内野山窯系の銅綠釉皿と考えられる。蛇の目釉剥ぎが見られる。17世紀後半(末)～18世紀前半に比定される。360は肥前系磁器皿(青磁)の口縁部で、波佐見窯系と考えられる。18世紀後半か。361は土師質の片口すり鉢で、口縁端部を厚く、丸く作っている。17世紀中葉前後の所産であろう。362は龍泉窯系青磁碗I-4類の口縁部片と考えられ、

12世紀中頃～後半に位置づけられる。363は肥前系陶器（唐津）の刷毛目碗で、外面に波状刷毛目が見られる。18世紀前半に位置づけられる。364は施釉陶器の鉢で、見込みに複数の胎土目、底面には墨書きが見られる。富田吉金窯産で、18世紀末～19世紀前半に位置づけられる。365・366は羽釜である。366には釣手が付いている。367・368は焙烙である。365～368は18世紀頃の年代が与えられる。369は火鉢で、波状文や菊花文が見られる。370は竈で内面刷毛目調整が施されている。371は土師質甕の口縁部である。372は土師質焙烙である。373は壺体部で、ヘラ書き沈線文と刺突文が見られる。弥生時代前期と考えられる。374は弥生時代後期の鉢で、くの字に外反する短い口縁部を有する。375はサスカイト製の石鉢で、先端に研磨痕が見られる。376は石皿で、中央部が凹んでいる。377～381は不明鉄製品で時期も不明である。377はその形状から鍔先の可能性がある。382～397は石鎚である。398～403、405～407、408は二次調整のある剥片もしくは製品の破片であるが、器種は特定できない。404は磨製石斧である。406も部分的に研磨痕が見られる。409～412は、やや扁平な自然石であるが、投弾の可能性を考えている。413～417は砥石である。形状もさまざまであるが、一遺跡から出土する点数としては多い。時期は限定できない。

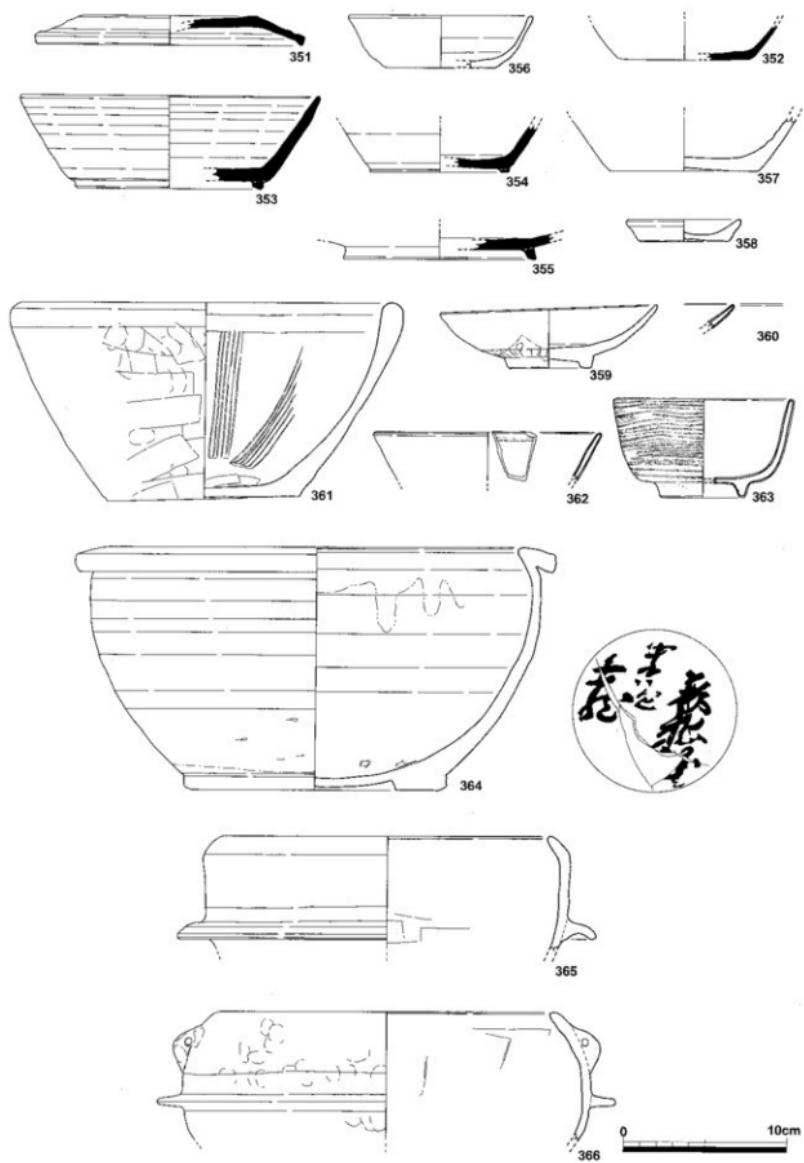
以上包含創出土資料中には、遺構が確認できていないものの、弥生時代前期・中期、奈良時代～平安時代の資料も含まれており、周辺にこれらの時期の移行の存在を推定させるものである。

片桐1992 片桐孝浩「第5章 考察 一古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』1992.1 香川県教育委員会・眞香川県埋蔵文化財調査センター

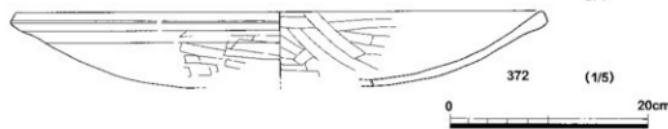
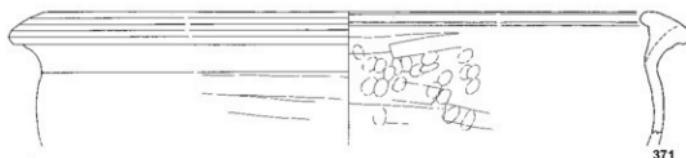
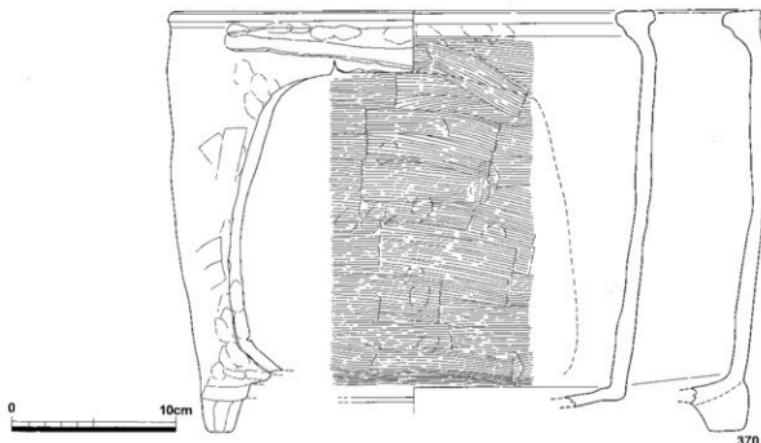
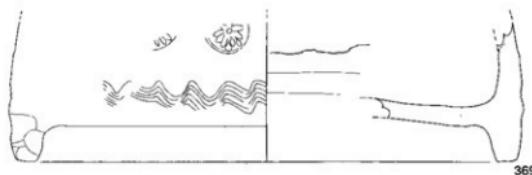
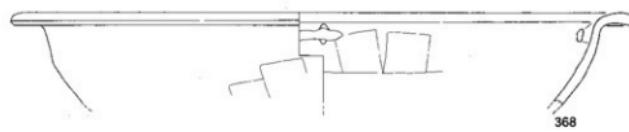
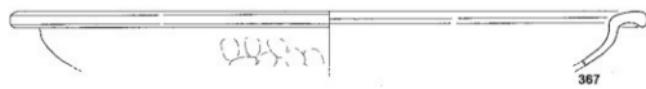
真鍋2000 真鍋昌宏「2 讀岐地域」「弥生土器の様式と編年 四国編」2000.3 木耳社



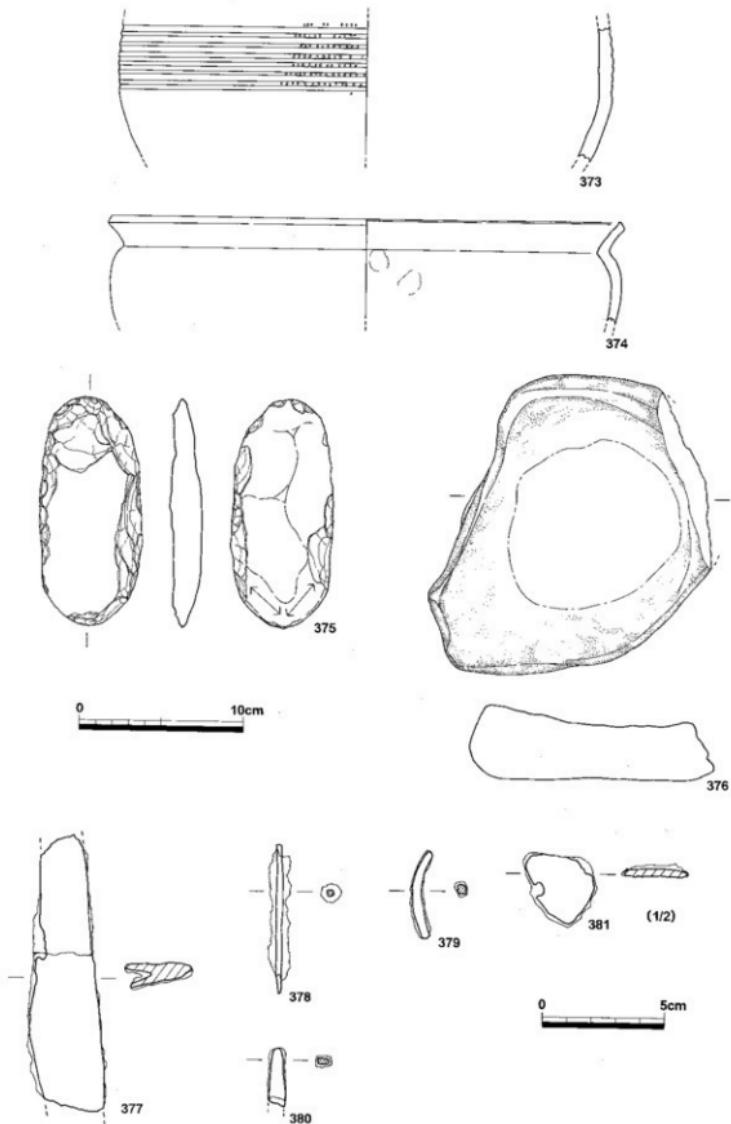
第87図 包含層出土遺物実測図② (1/3)



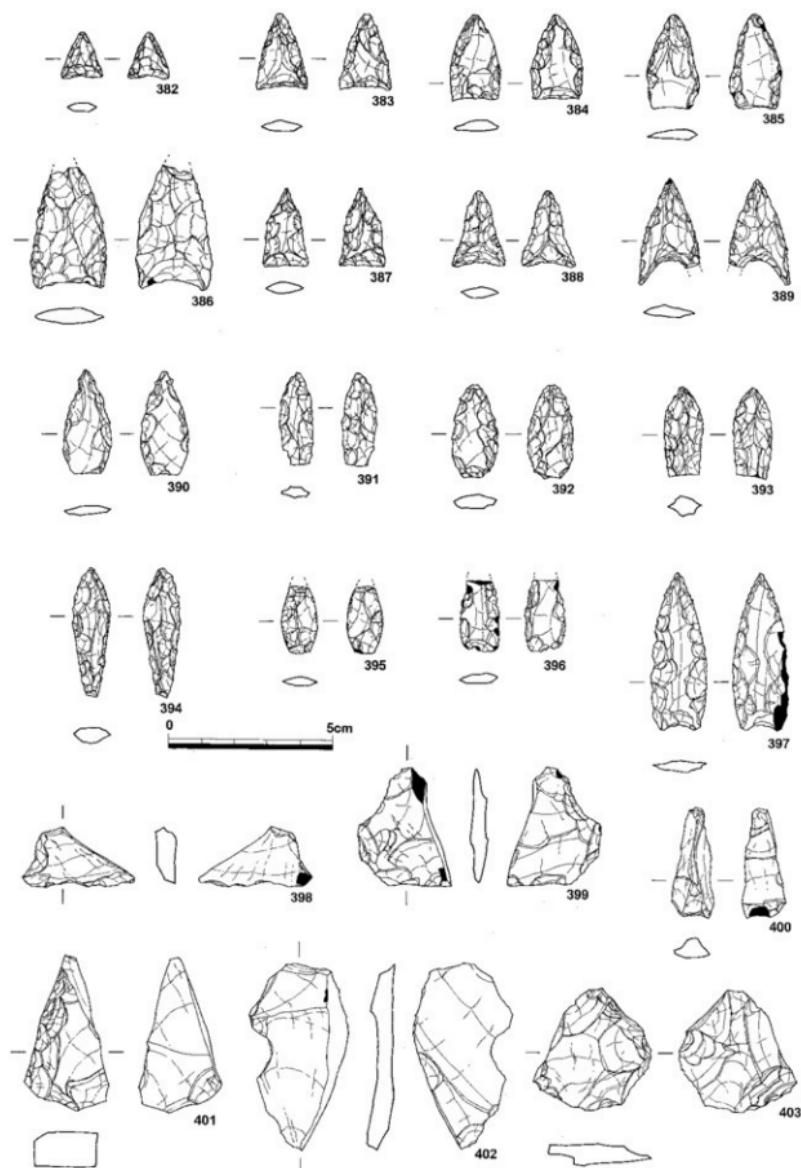
第88図 包含層出土遺物実測図③ (1/3)



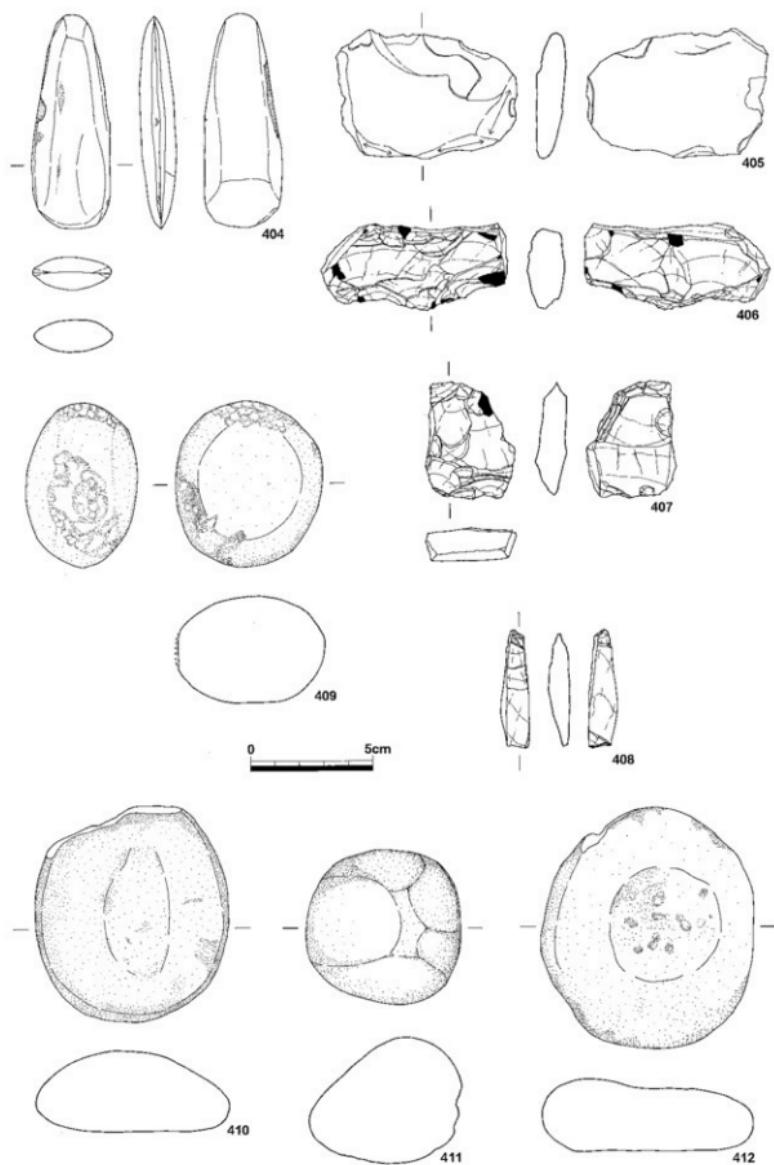
第89図 包含層出土遺物実測図④ (1/3)



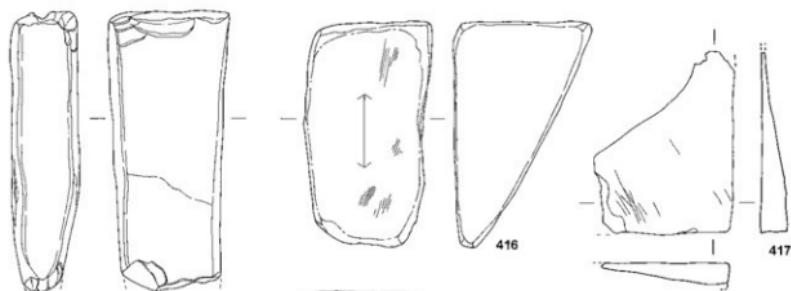
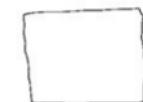
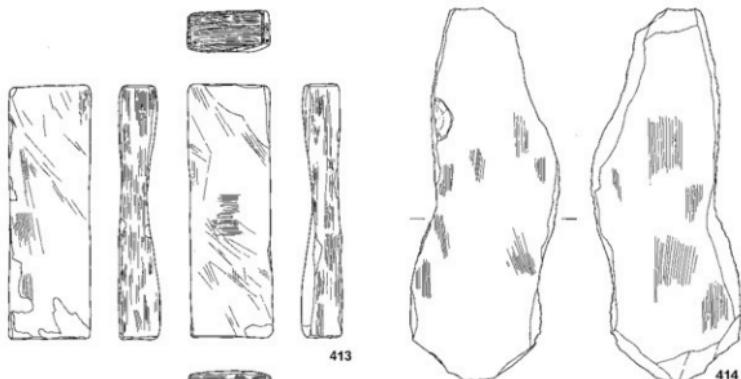
第90図 包含層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第91図 包含層出土遺物実測図⑥ (1/3)



第92図 包含層出土遺物実測図⑦ (1/3)



第93図 包含層出土遺物実測図⑧ (1/3)

第4節 自然科学分析

香川県、山南遺跡における樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、山南遺跡より出土した柱材4点である。

3. 方法

カミソリを用いて、試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を第3表に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

第3表 樹種同定結果

No	出土位置	種類	報文番号	結果 (和名／学名)
1	SB03	柱材	73	ヒノキ？ Chamaecyparis obtusa Endl.?
2	SB15	柱材	76	スギ Cryptomeria japonica D.Don
3	SB09	柱材	75	ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl.
4	SB02	柱材	74	コウヤマキ Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc.

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

写真1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的急で、晩材部の幅が広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

写真2

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～8細胞高ぐらいである。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌、耐朽、耐湿性も高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

写真3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～10細胞高ぐらいである。

以上の形質よりヒノキに同定される。なおNo 1 SB03 柱材 報73の試料は、保存状態が悪く、横断面、放射断面、接線断面共にヒノキの特徴を示すが、放射柔細胞の分野壁孔の型が不明瞭な為、ヒノキ？とした。

ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

5. 所見

同定の結果、山南遺跡出土の柱材はスギ、コウヤマキ、ヒノキ、ヒノキ？であった。いずれも針葉樹材であり、律令期以降は建築材として比較的よく使われる材である。

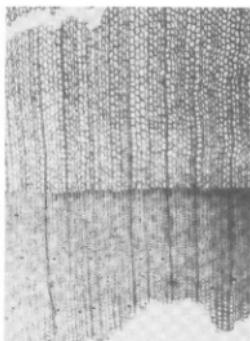
参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

山南遺跡の木材



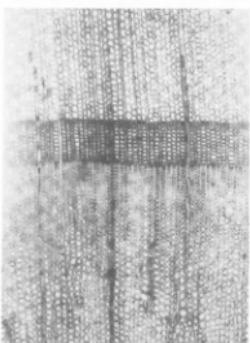
横断面 ————— : 0.5mm
1. 2 SB15 柱材 報76 ヒノキ



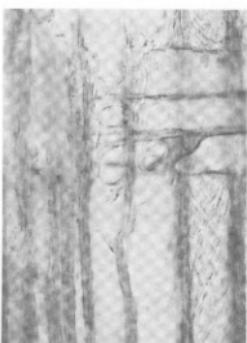
放射断面 ————— : 0.05mm



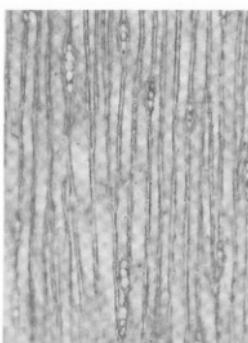
接線断面 ————— : 0.2mm



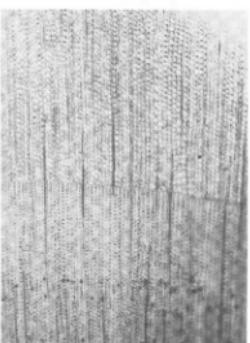
横断面 ————— : 0.5mm
2. 4 SB02 柱材 報74 コウヤマキ



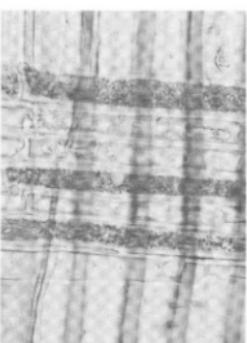
放射断面 ————— : 0.05mm



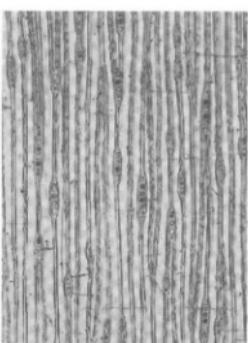
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm
3. 3 SB09 柱材 報75 ヒノキ



放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm

第4章 まとめ

山南遺跡の調査結果について、前章で遺構別に記述を行った。ここでは、同調査のまとめとして、遺跡の変遷について記述する。

当遺跡で最も古い遺物は、弥生時代前期の資料である。本調査区内では、この時期の明確な遺構を検出していないが、窪地にたまたま土層中から出土している土器など、ほぼ单一時期の所産と考えてよい。第94図のように、本調査区の南側で普通寺市教育委員会が実施した調査では、同時期の土坑から壺が検出されており、この時期の遺跡が周辺に広がることが想定されるが、本報告での遺構変遷時期では除外しておく。

今回調査で確認された遺構群は、全体でⅠ～Ⅳ期に区分される。以下、各時期について概説する。
(第95～98図)

I期（弥生時代後期）

本調査区内で確認された遺構は溝状遺構のみである。溝状遺構は、調査区東辺を南北に延び調査区南部でやや湾曲するもののほぼ直線的に延びており、機能や性格は不明である。先に触れた普通寺市教育委員会調査区では、竪穴住居跡1棟(4.4m×4.7m、隅丸方形)が検出されており、この時期の集落の中心部が普通寺市教育委員会調査区及びその西・南側に想定される。

時期は、出土資料から弥生時代後期後半頃を中心とするが、やや前後する時期の資料も見られ、いくつかの小期が設定できるかもしれない。

II期（古代）

古墳時代の溝状遺構が調査区西辺で確認されたこと、SX01から管玉が出土していることがあげられる。検出遺構数や出土遺物が少ないことから、集落跡の周辺とは考え難い。

また、遺構は検出されていないものの、これに後出する奈良時代～平安時代と推定される資料も出土しており、いくつかの小期が考えられることのほか、今後周辺でこの時期の遺跡が確認される可能性もある。

III期（中世）

調査区全域で掘立柱建物跡や溝状遺構などが確認された。東辺の溝状遺構を除き、ほぼこの地域の地割に平行する形で集落が形成されている。建物の切り合い関係から数時期に区分され、出土遺物から4つの小期を設定することができる。以下、この小期により掘立柱建物跡の変遷を記す。

III-1期（12世紀中葉～後半）

SB01・02及びSA01とSD25・26・30が当該期に位置づけられる。SB01からは遺物が出土していないが、SA01がSB02と共に用されると考え、同時併存していたとしている。出土遺物からこの時期に考えているSD25・26・30は、主軸方向がN=32°～Wであり、丸龜平野の条里型地割に近い方向を示すが、SB01・02はN=13～16°～Wと、まったく異なる方向性を持つ。この掘立柱建物跡の方向は、山南遺跡の掘立柱建物跡に共通するもので、古代～中世の過渡期にこの地域では条里型地割を基準とする土地区画が崩れたものと考えられる。

ただし、あくまでも埋土中遺物を前提としているため、掘立柱建物跡と溝状遺構が同時に併存していたかどうかは厳密には不明であり、条里型地割が先行するものと考えた場合、SD25・26・30の廃絶がこの時期で、SB01・02がこの時期に建てられたと考える考え方もある。

なお、SD23では出土遺物は無いが、次の段階に位置づけているSD24に先行することから当該期に位置づけうると考えている。このことは、先に述べたSD25・26・30の方向と矛盾しない。

III-2期（13世紀前半～中葉）

SB04・08とSD24が当該期に位置づけられる。また、SB10は出土遺物がないが、配置からこの時期に該当するのではないかと考えている。この3棟の内、SB08が庇を持ち基底石や根石が用いられたしっかりした建物であり、この時期の中心建物と考えられる。SD24は、前段階の溝状遺構の方位にはほぼ近い値を持つことから、前段階から機能していたことも想定されるが、確証が無い。

III-3期（13世紀後半）

SB03・07・13・14とSD02・03・04・06・15・32、SE03が当該期に位置づけられる。また、SB12は出土遺物がないが、配置からこの時期に該当するのではないかと考えている。

建物跡は、北側に南北を主軸とする2棟、南側に東西を主軸とする3棟に分かれ、母屋はSB13と考えられる。北側のSB03・07の内、SB07は総柱の建物で蔵としての機能を持つとすれば、北側の一群と南側の一群の間に井戸も見られ、南北に長い屋敷地を想定することもできる。西辺はSD02・03・04により画されているが、東辺に溝が見られず、調査区東側に存在する小規模な河岸段丘による地形的な要因であると考えられる。

III-4期（14世紀中葉～後半）

SB05・09・10・15とSD31、SK20が当該期に位置づけられる。また、SB06は出土遺物がないが、隣接するSB05との位置関係からこの時期に該当するのではないかと考えている。

建物跡は、前段階同様南北に分かれるが、母屋は北側のSB09になり、南側のSB15は総柱で蔵としての機能が考えられるが、庇もしくは縁を持つなど否定的な問題も残す。

SD31は、掘立柱建物跡と異なる方向性を持つが、先に触れた河岸段丘との関係から、これと平行する方向で掘削された可能性が高い。

なお、掘立柱建物跡の内、SB09・10・15の3棟は14世紀前半の遺物も含むため、14世紀前半が空白期になることは無いと考えている。

SK20は、前章でも触れたように、墓としての可能性を考えており、明確な屋敷地を復元することはできないが、屋敷墓の可能性が高いと考えられる。

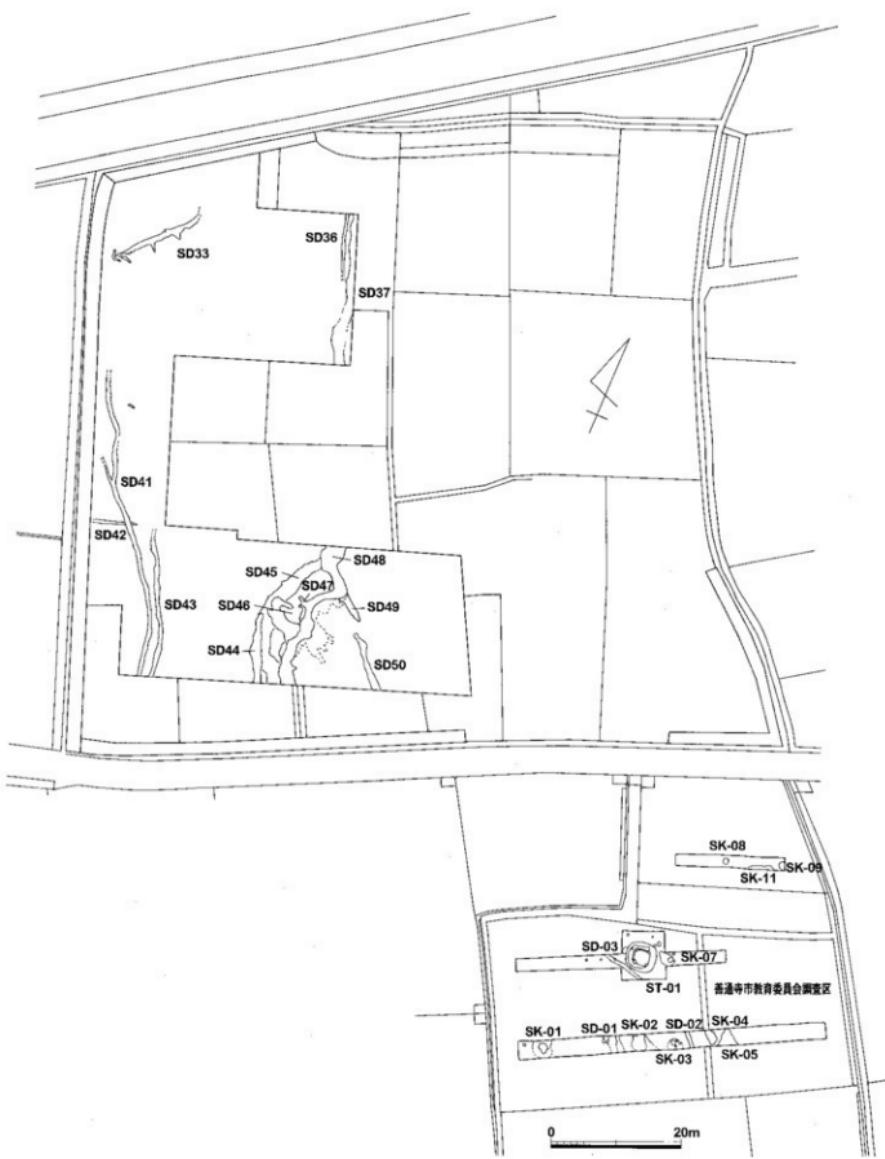
なお、柱穴や建物周辺の溝状遺構の出土遺物からは、16世紀代に位置づけられる遺構は見られず、この段階で集落が廃絶し、新たな選地が行われたものと考えられる。今後、この時期の土器編年等が確立し、先にも述べたように、建物を復元できない数多くの柱穴の解釈が可能となれば、より集落の変遷が明らかになろう。

IV期（近世以降）

近世以降に位置づけられる遺構は、大半が土坑で、検出状態も散発的である。この段階では、現状の田畠として機能した土地であると判断できる。

出土遺物からは、18世紀代以降に形成された遺構が多い。

以上のように、山南遺跡は今回の調査や善通寺市教育委員会調査によって、遺跡の一端が明らかになった。弥生時代前期を含めると5期にわたる複合遺跡であり、本調査区の周辺を含めて数期の集落が展開する可能性が高い。ただし、河岸段丘の存在から、その多くは本調査区の南側に広がることが想定される。



第94図 調査区全体図

第95図 連構変遷図① (1/600)

20m

0

—

—

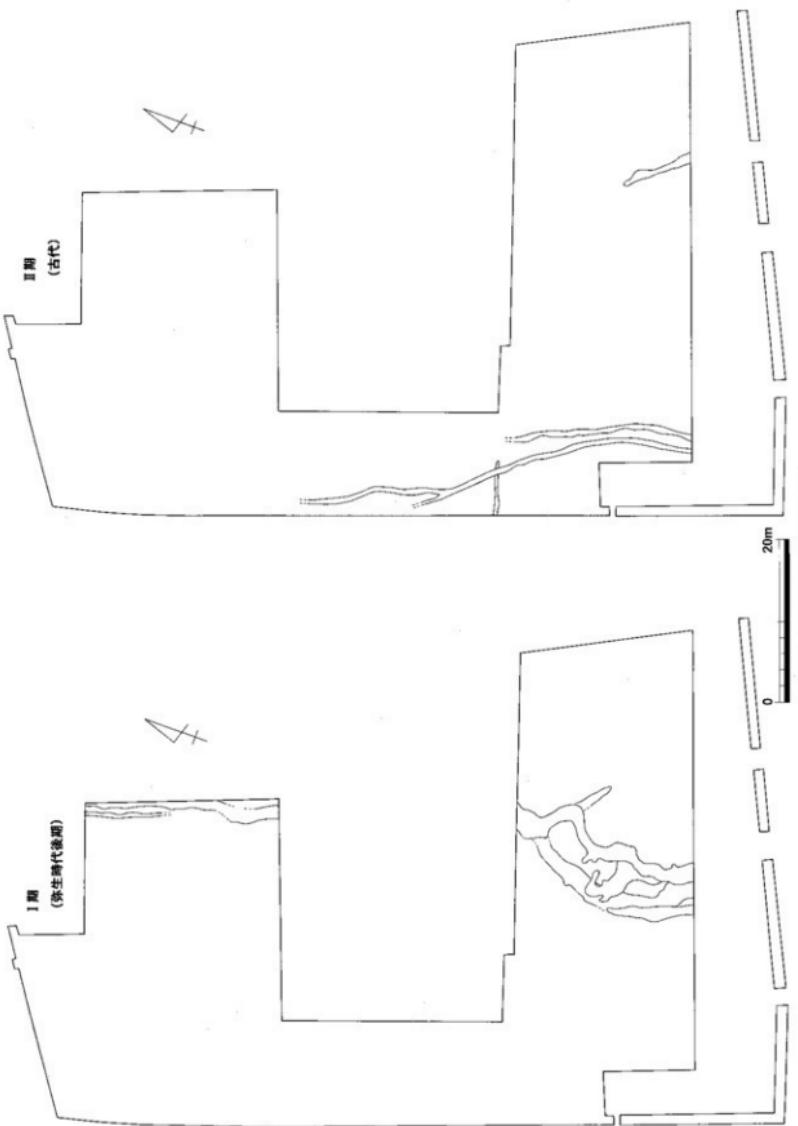
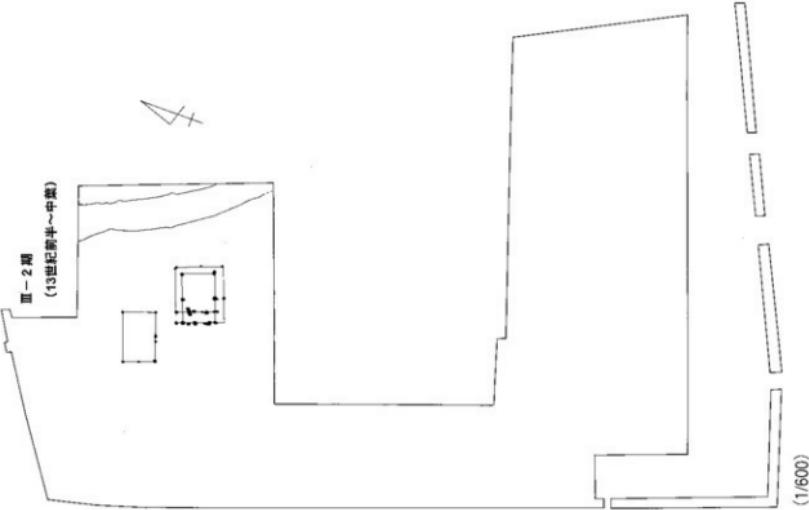


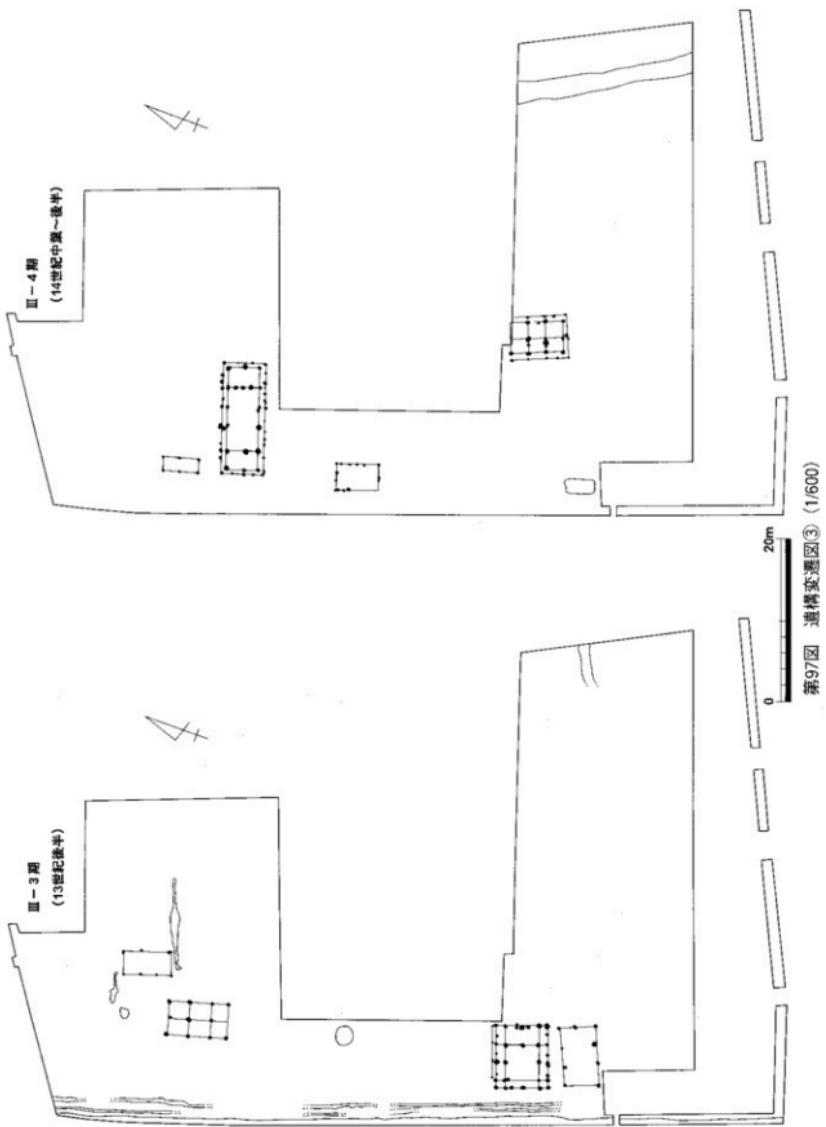
図-1期
(12世紀中葉～後半)



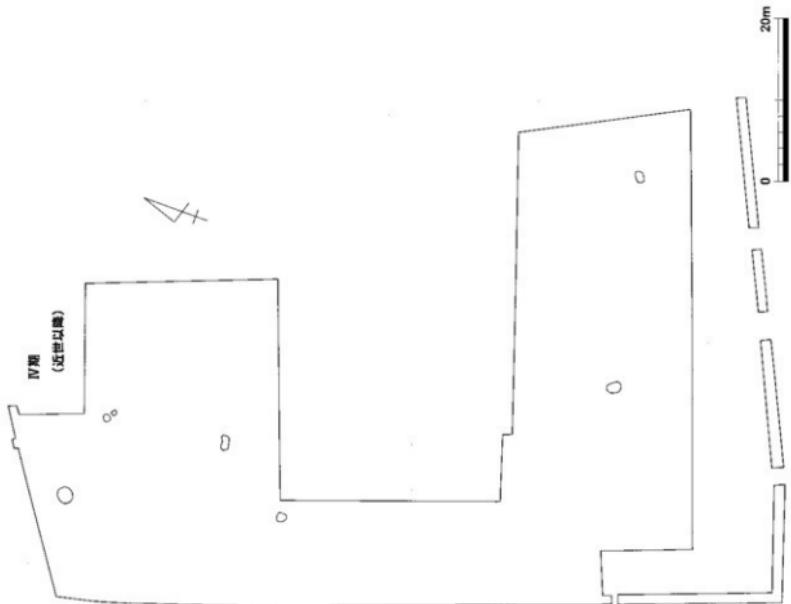
図-2期
(13世紀前半～中期)



第96図 遺構変遷図② (1/600)



第98図 遺構変遷図④ (1/600)



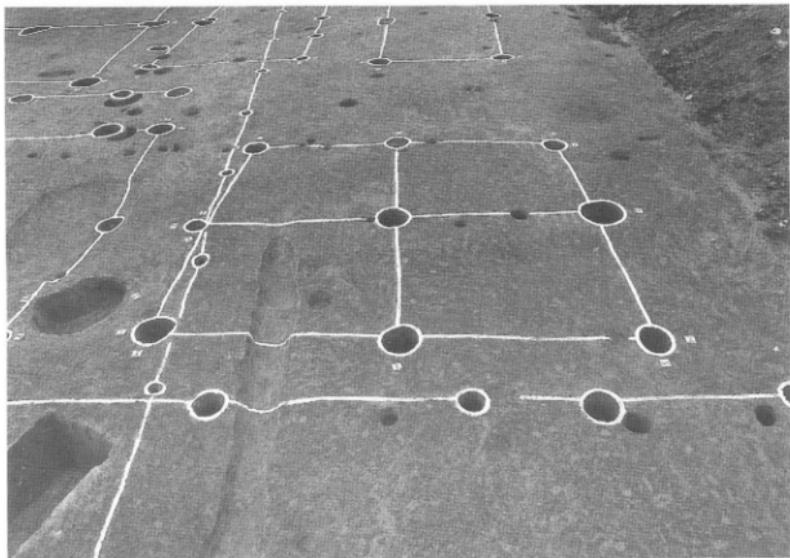
山南遺跡 觀察表

卷之三

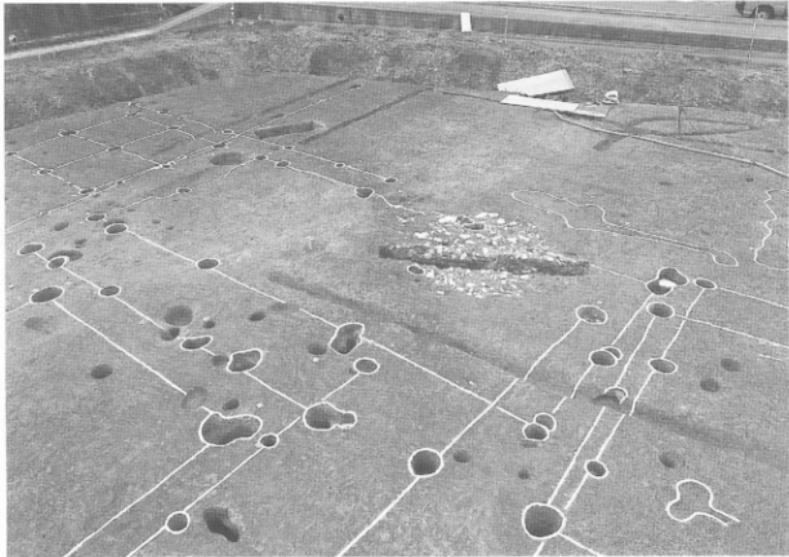
木器模型表

地名	地圖名	地圖	地圖	地圖	地圖
新竹市	新竹市	新竹市	新竹市	新竹市	新竹市
新竹縣	新竹縣	新竹縣	新竹縣	新竹縣	新竹縣
苗栗縣	苗栗縣	苗栗縣	苗栗縣	苗栗縣	苗栗縣
台中市	台中市	台中市	台中市	台中市	台中市
彰化縣	彰化縣	彰化縣	彰化縣	彰化縣	彰化縣
南投縣	南投縣	南投縣	南投縣	南投縣	南投縣
雲林縣	雲林縣	雲林縣	雲林縣	雲林縣	雲林縣
嘉義縣	嘉義縣	嘉義縣	嘉義縣	嘉義縣	嘉義縣
宜蘭縣	宜蘭縣	宜蘭縣	宜蘭縣	宜蘭縣	宜蘭縣
花蓮縣	花蓮縣	花蓮縣	花蓮縣	花蓮縣	花蓮縣
臺東縣	臺東縣	臺東縣	臺東縣	臺東縣	臺東縣
澎湖縣	澎湖縣	澎湖縣	澎湖縣	澎湖縣	澎湖縣
金門縣	金門縣	金門縣	金門縣	金門縣	金門縣
連江縣	連江縣	連江縣	連江縣	連江縣	連江縣

山南遺跡 図版

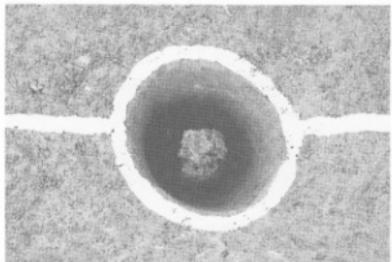


SB01全景（北から）

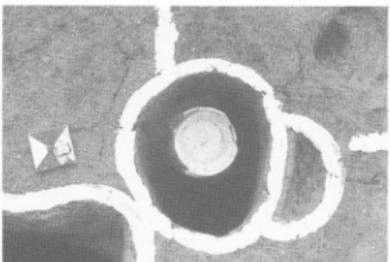


SB02全景（南東から）

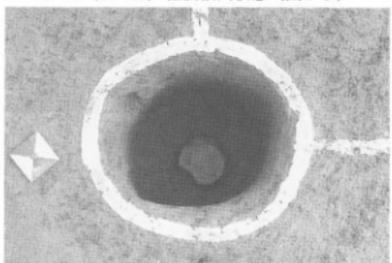
図版2



SB02 (SP153) 柱痕検出状態（西から）



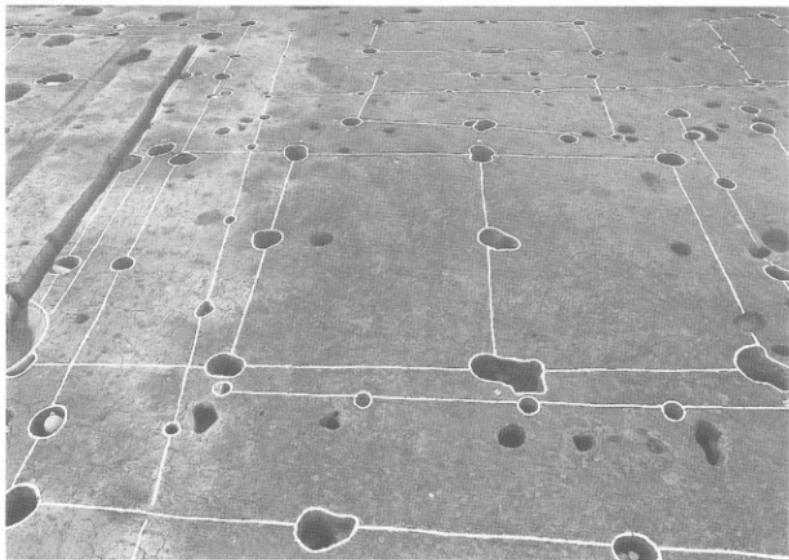
SB03 (SP137) 遺物出土状態（北から）



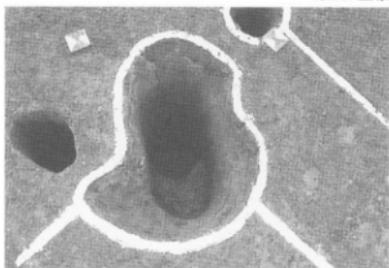
SB04 (SP97) 遺物出土状態（西から）



SB05・06全景（東から）



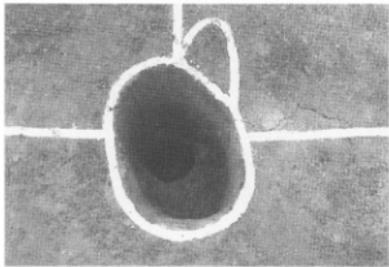
SB07全景（東から）



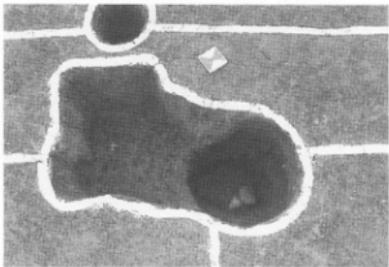
SB07 (SP271) 完掘状態（南西から）



SB07 (SP277) 遺物出土状態（西から）

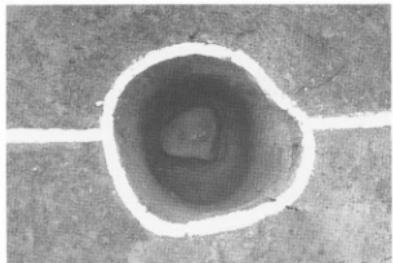


SB07 (SP279) 完掘状態（西から）

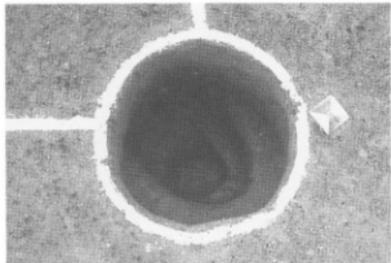


SB07 (SP287) 根石検出状態（西から）

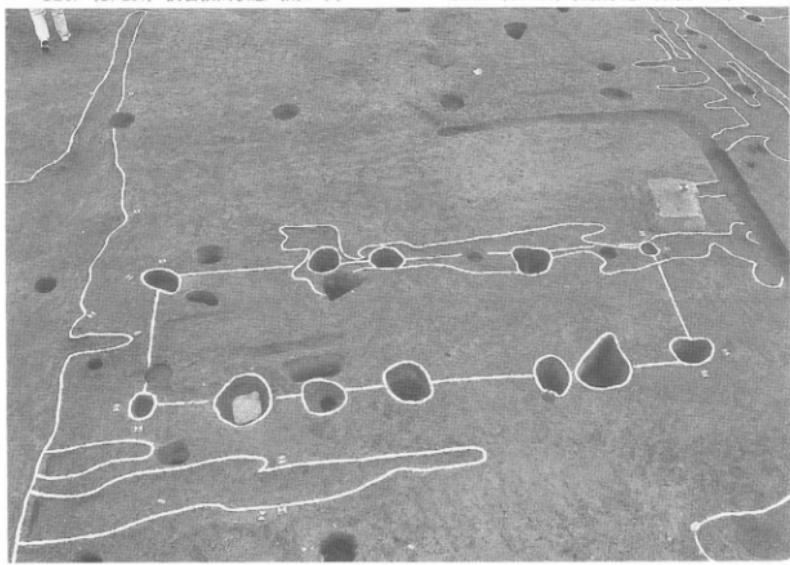
図版4



SB07 (SP291) 根石検出状態（南から）



SB07 (SP300) 完掘状態（北西から）



SB08全景（西から）

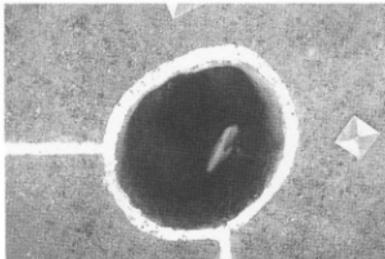


SB09全景（南から）

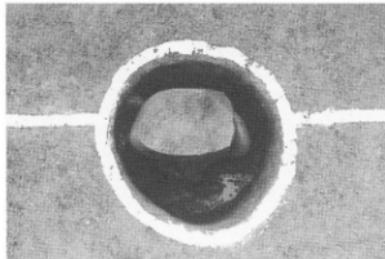


SB09全景（西から）

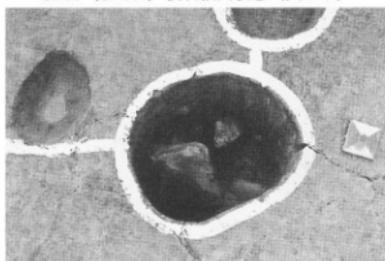
図版6



SB09 (SP367) 根石検出状態 (西から)



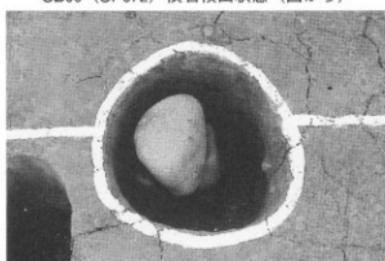
SB09 (SP369) 根石検出状態 (東から)



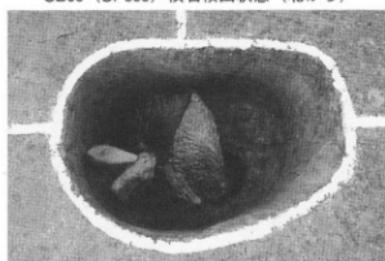
SB09 (SP372) 根石検出状態 (西から)



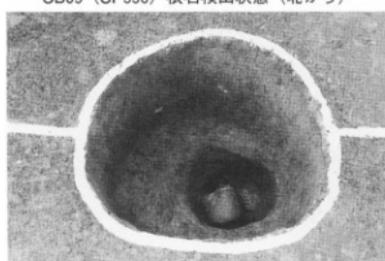
SB09 (SP395) 根石検出状態 (北から)



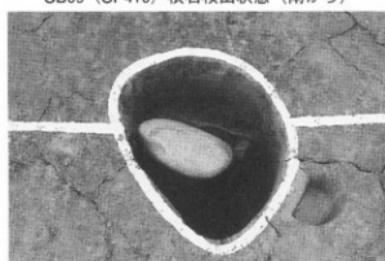
SB09 (SP396) 根石検出状態 (北から)



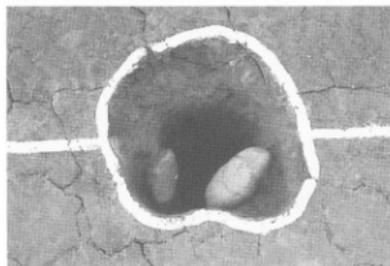
SB09 (SP410) 根石検出状態 (南から)



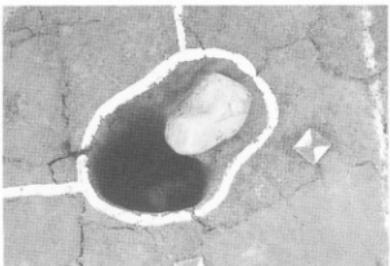
SB09 (SP411) 根石検出状態 (南から)



SB09 (SP412) 根石検出状態 (南から)



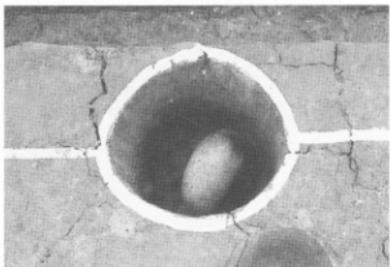
SB09 (SP420) 根石検出状態（南から）



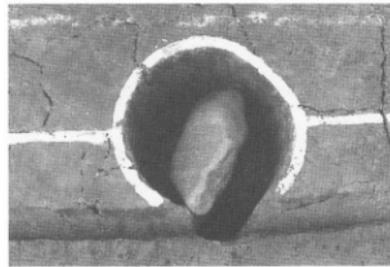
SB09 (SP421) 根石検出状態（南から）



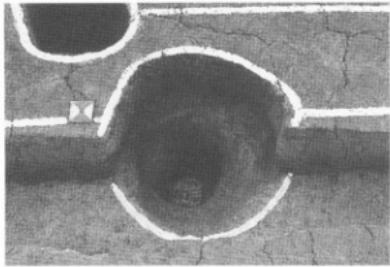
SB09 (SP423) 根石検出状態（北から）



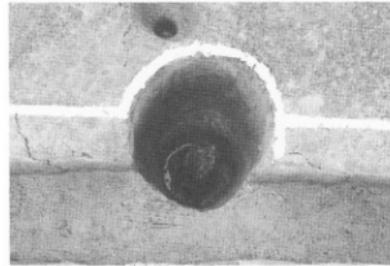
SB09 (SP424) 根石検出状態（北から）



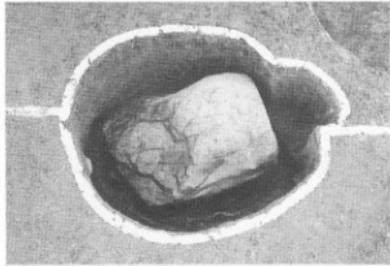
SB09 (SP426) 根石検出状態（南から）



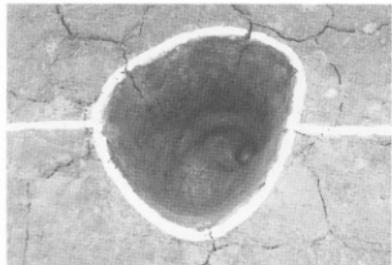
SB09 (SP427) 根石検出状態（南から）



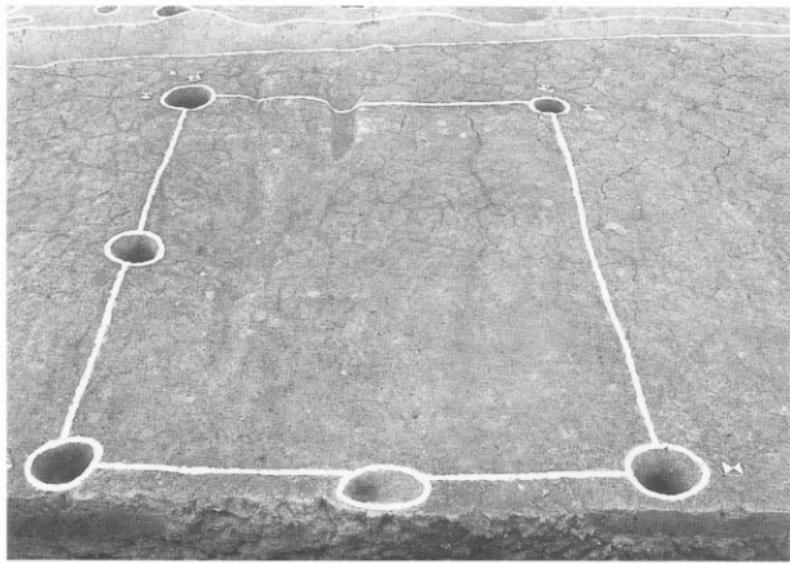
SB09 (SP431) 柱痕検出状態（南から）



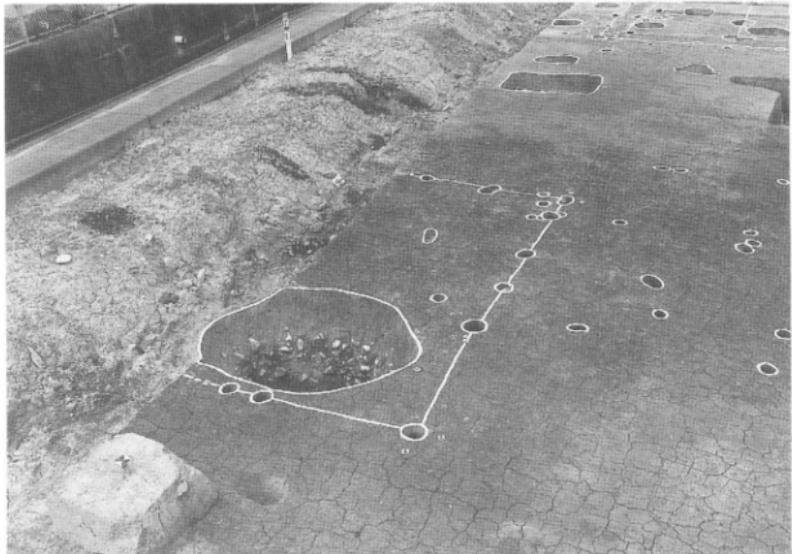
SB09 (SP434) 根石検出状態（西から）



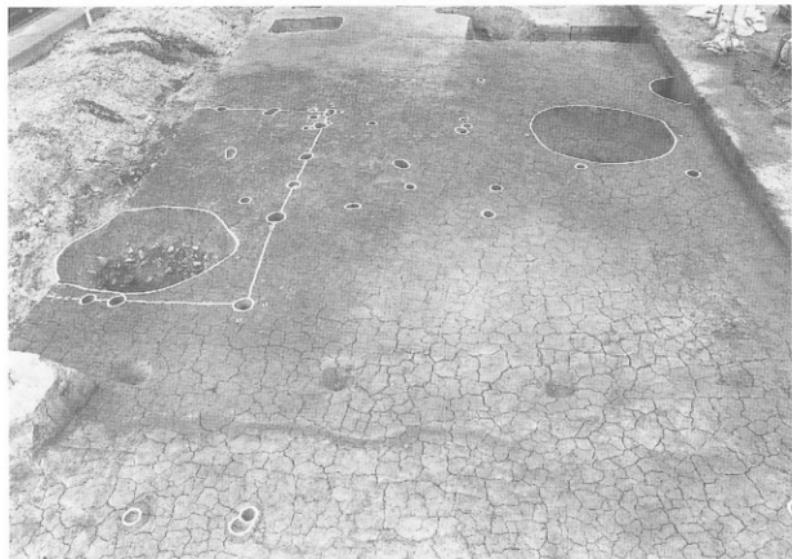
SB09 (SP454) 完掘状態（西から）



SB10全景（南から）

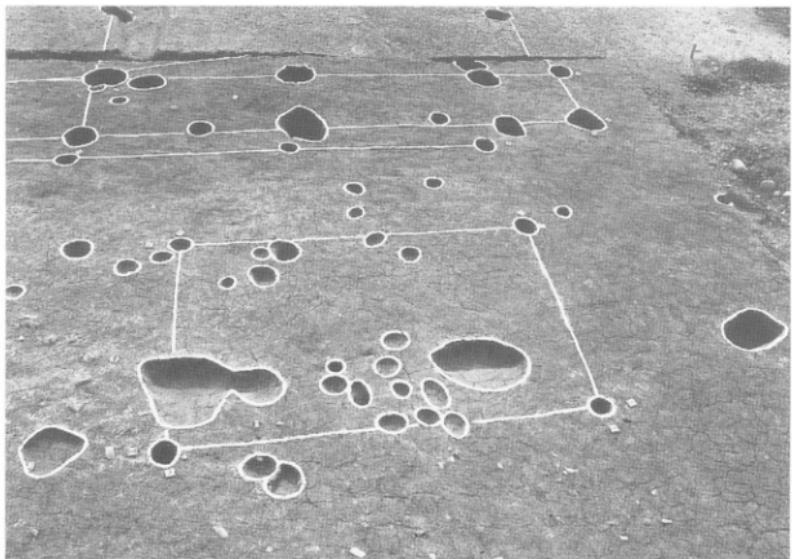


SB11・SE04全景（南東から）

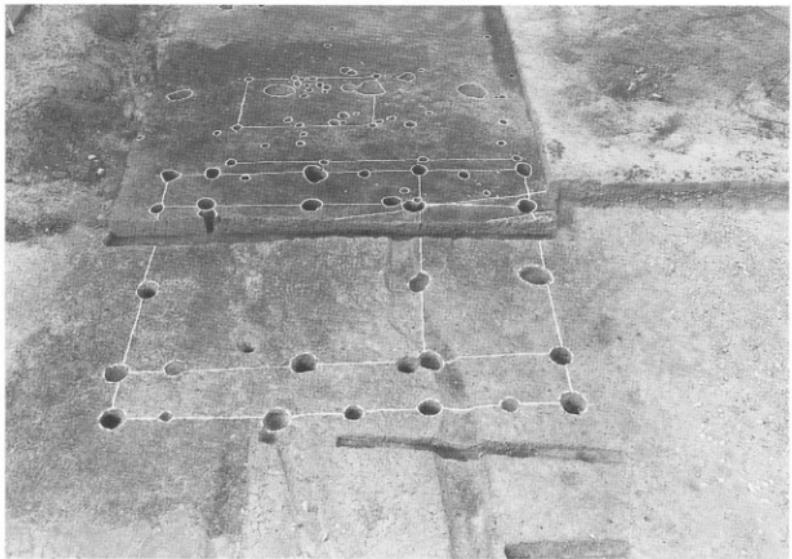


SB11・SE03・04全景（南から）

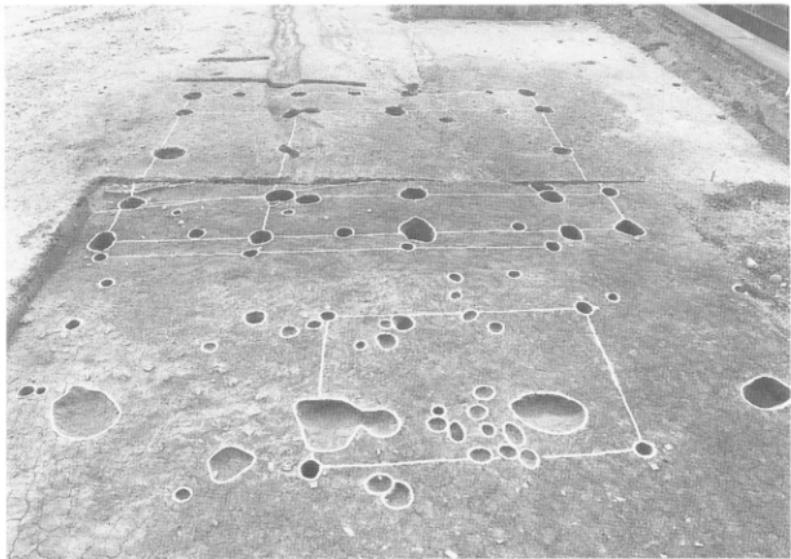
図版10



SB12全景（北から）



SB12・13全景（南から）

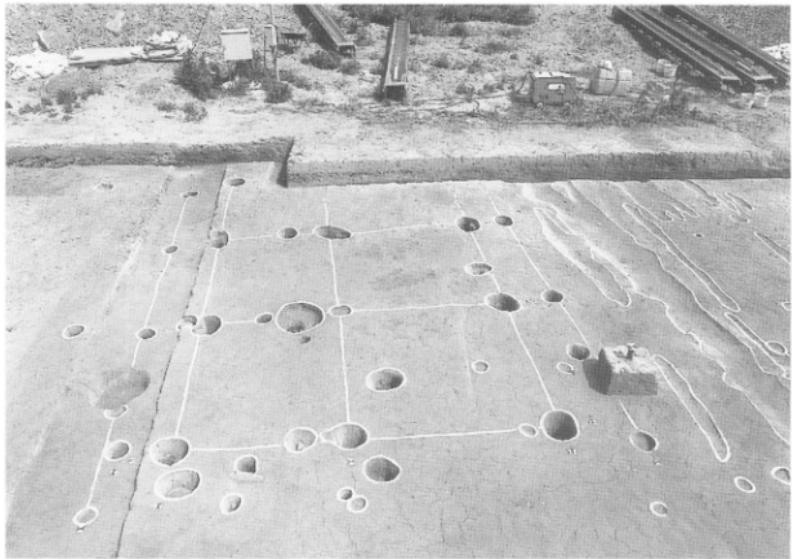


SB12・13全景（北から）

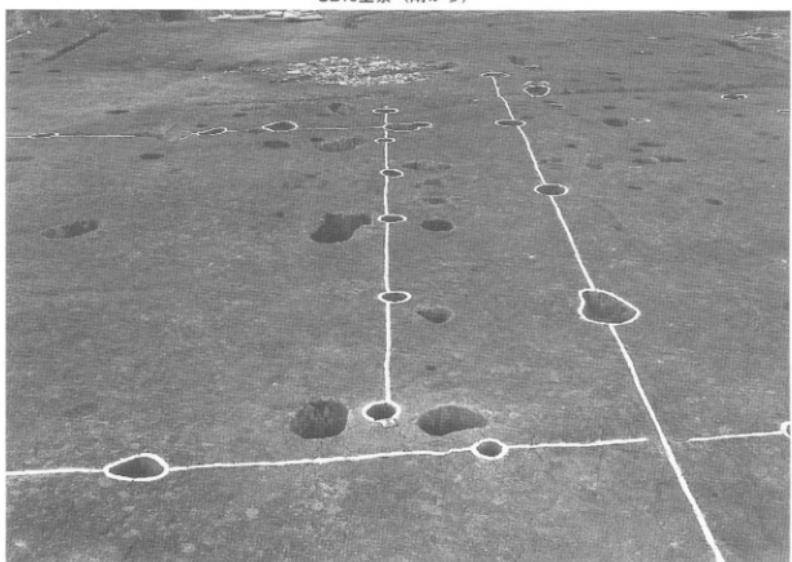


SB13全景（南から）

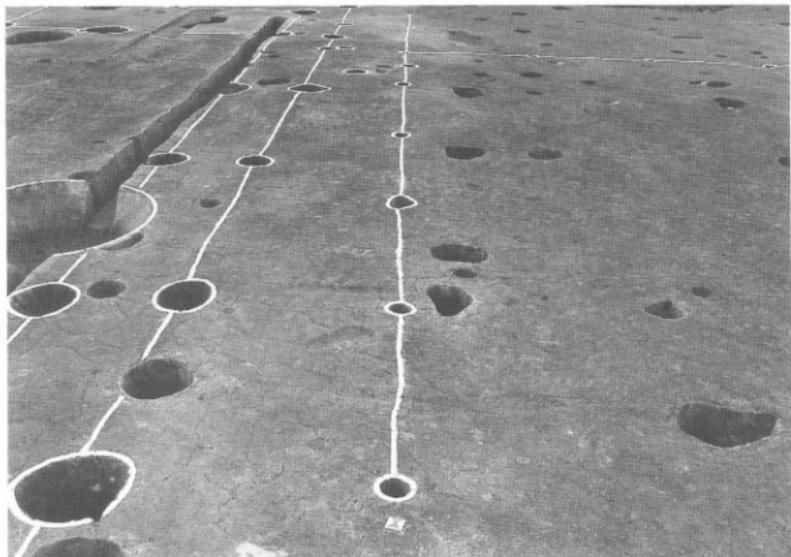
図版12



SB15全景（南から）



SA02全景（南から）



SA03全景（東から）



SD15全景（東から）